古墳の出現の年代を考えてみようと思う。

第三章 王墓とその時代

第一節 王の出現

呼ぶとしても、最古の古墳がどれなのか、明確であるわけではない。そこで、高槻市域にある古墳に限定し には半世紀もの差がある。いずれが真に近いのであろうか。少なくとも古墳出現の時をもって、古墳時代と の 古 墳時代 代 が現状である。ある者は三世紀中頃とし、またある説は三○○年を遡り得ないとする。そこ 古墳時代のはじまりを紀元何年からとするかという紀年の問題は、研究者によって異なるの

は、 る。 区分については従来、研究の主たる対象であった古墳の特徴を析出して、いろいろな区分案がつくられてき た。だが、古墳をつくらない前後の時代や地域との関係を考察するとなると、まことにやっかいなことにな 古墳時代というのは、一口にいえば古墳がつくられた時代のことである。だから、この時代の細かい時期 土器であろう。古墳時代には二系統の土器がある。一つは弥生土器の系統をひく、赤褐色をした土器で のぞましいのは、どこでも、 いつでも対比できる材料を基準にすることである。その要求に か なうの

れは土器の歴史だけに限ってみても、土師器と須恵器という硬軟二つの土器 「土師器」と呼ばれている。もう一つは、 「須恵器」と呼ばれている。須恵器がいつから出現するかという年代の問題は、 朝鮮半島を通じて、新たに古墳時代に渡ってきた鼠色をした土器 ――正しくは土器と陶器という 極めて重要である。

べきかもしれないが――を使う長い歴史がこのあとに続くからである。 須恵器については、大阪府南部の陶邑の窯跡をはじめとして、生産址を対象として調査がおこなわれ、

なら、その前後の時期について、土器による年代の決定も可能になる。 はあるが、須恵器出現前後の、土師器・須恵器の組成も知られているので、須恵器出現の年代を確定できる 跡で、木簡等の文字資料と共伴する時期の土器については、確かな年代が与えられている。 系はみられないのが現状である。ただ、もっと後の時代になると、平城宮跡などの宮殿・官衙遺構のある遺 る。 恵器の編年体系が田辺昭三氏によってつくられた。それは詳細を極め、 だが、調査の対象が生産址であるところから、共存する土師器との関連が明確でない。 方、土師器については、諸研究者によって、部分的な編年案が提出されているものの、 一世紀間に五つの型式を設 また、 一貫した編年体 局部的 けて

陶なる 困難がある。 最古であるという保証はない。まして、 ほぼ五世紀の中で考えようとしている状況にある。 さて、それでは須恵器はいつ出現したと考えられるだろうか。かつては、日本書紀の雄略七年条にみえる 「高貴を一つの目安とした時期もあった。しかし、この記事が須恵器流入のことを語っているとしても、 現在、 諸研究者によって、 書紀が記載する大王の実年代をどう解するかという基本的な問題で 掲げる根拠は相違しても、 いまここでは、 須恵器と類縁関係にある朝鮮半島の新羅 五世紀の初めとか中頃といった具合に、

I

ことはいうまでもない。

○年頃と推定しておこう[たずねて』『古代史発掘』6] およびそれらに連なる灰陶系土器の相関関係を一 ただ、 つの拠所として、 これはある目安にすぎない。 須恵器初現の年代を四三〇~四

阪府立島上高等学校研究紀要復刊3 】およびその間に介在する東大阪小若江北遺跡の資料[跡調査報告』岡山県高島遺跡調「大阪府松原市上田町遺跡の調査」大]およびその間に介在する東大阪小若江北遺跡の資料[坪井清足 『岡山県笠岡市高島遺 紀末から五世紀初めまでの 賢会]等を活用して、 ところで、 今後なお検討の余地はあろう。 3の研究(2)」大阪府文化財調査報告書11 】、「ロ・田辺・田中 佐原「河内船橋遺跡出土遺)、 須恵器出現前の土師器に関する編年については、 上田町Ⅱ式から船橋0Ⅰ式までの間に四つの型式を設定しようと考える。 ほぼ一二〇年間に相当することになる。 弥生時代後期の編年に用いられた大阪府松原市上田 大阪府柏原市船橋遺跡の土器組成を出発点と ただし、これもまた一つの試案にすぎな 町の資料[正三 それは、 世

て、 山B1号墳の年代は、 B1号墳・A1号墳) について、 られるなら、 う。だとすると弁天山C1号墳の年代は、 器のものさしにあてはめて考えてみると、一つの手懸りとして、弁天山C1号墳の前方部埋葬施設に伴った 土師器がある。 さて、そこで初めの問題にかえろう。 年代を推定することは、 前方後円墳の形態・規模・立地等から、 その特徴は、 四世紀の初頭を上限とすることになろう。 小若江北遺跡の土器と近い。 単に想像の域を出ないものであって、 それぞれ首長の在位期間を三〇年と仮定した場合、最も古いと推定する弁天 高槻市域では、いつごろ古墳がつくられはじめたかという 四世紀の中頃を遡らないであろう。 C1号墳に先行する可能性のある二基の古墳 おそらく、その中の新しい部分に属するのであろ しかし、内容の明らかでない古墳につい 今後慎重に検討すべき課題の一つである もしそう仮定することが認め 蕳 題 (弁天山 を

かで、 なお、 多少年代のとり方は変るかもしれないが、もし三品彰英氏の考証に従うとすれば、五三三年前後にな 高槻市域には、継体陵に比定される今城塚古墳がある。継体天皇の没年や古墳築造の幅をどうみる

る【題」『日本書紀研究』2】。

になるであろう。 ら、その没年六六九年を考慮しなければならないだろう。だが、確証があるわけではないから、 とどめておこう。ただ、古墳時代の下限の年代を、市域内に限ってみたとき、ほぼ七世紀中頃は一つの目安 さらに、もう一つ加えるべきものに、阿武山古墳があげられよう。もしこの被葬者を藤原鎌足 とす る な 推測の域に

須恵器の特徴による時期区分【『陶邑古窯址群ー』】に従って、 を六二〇年頃、 れ以前を前期、 内で古墳がつくられた時代であったことになる。以下の記述では、古墳時代を須恵器出現の時期を境に、そ さて、以上に述べたところから、およそ四世紀初頭から七世紀中頃までの、ほぼ三五〇年間が、 Ⅲ期の終りを六八○年頃とする。 以後を後期として記述することにしたい。なお、後期については、 Ⅰ期とⅡ期の境を五二○年頃、 田辺昭三氏が設定した、 Ⅱ期とⅢ期の 高槻市 域

Ξ 墓 の 丘 芥川の西岸に位置する南平台は、現在みるような平坦な丘ではなかった。標高一〇〇メートル 前後の丘が起伏を重ねながら、ほぼ南北に走り、それを脊梁部とする尾根が幾筋も東へのび

ていた。 った。脊薬部の高いところには、前方後円墳がつくられ、川西や服部からは、隆々たる墳丘を望むことがで 最も高い丘を利用してつくられた弁天山古墳(B1号墳)は直径約七○メートル・高さ約一○メート それぞれの尾根の間には深い谷が東からはいり、谷筋にはせきとめてつくられた溜池がいくつかあ 様は、まことに「王墓の丘」の名にふさわしいものであった [墳群の調査] 大府報77 方向はさきのA1号墳とほとんど一致する。後円頂部の標高は九五メートル余である。 西方古墳(C1号墳)があった。 後円部中央に、三角点の標石が設けてあり、その高さは海抜一○四メートル余である。現在この古墳は南平 と住宅造成のため、 台の住宅地の西側に、 ハウスのところにあったが、ゴルフ場をつくるため姿を消してしまった。以上三基の前方後円墳が併立する ルで、頂部の標高約九二メートル余、その東に前方部がある。 (A1号墳)がある。その位置は脊梁部の南端にあたり、最も平野部に近い。後円部の直径は約七○メー の大きな後円部と、その北へのびたやや短かい前方部とからなり、その全長は約一〇〇メート 前方部の大部分が失われてしまった。 墳丘のみが高く残されている。この古墳の南約二○○メートルのところに岡本山古墳 全長約七○メートル、後円部径四三メートルの前方後円墳で、その主軸の B1号墳の北約三○○メートルのところに大蔵司 全長約一二〇メート ルである。 ゴルフ場のクラブ・ 名神高速道 ルである。

が景観的にどうなっているか、立地条件や大きさなどを比較検討するなら、ある程度の手懸りを得られるか は特定の被葬者のために、 はC1号墳だけであるから、 しれない。 三つの古墳 相互関係 そこで、この三古墳を対比してみよう。 くられた時間的前後関係はどう考えられるのだろう。三基のうち、 さて、この三基の前方後円墳が、同時につくられたことが考えがたいとすれば、 自然の山丘に手を加えて、巨大な形をつくりあげてあるのだから、 埋葬主体や副葬品を比較して前後関係を決めることはできない。 埋葬主体の調査されたの そのつくり山 しかし、 それらがつ

その

ル、その高さは約一〇メートルであって、

B1号墳とA1号墳の後円部の径はともに、約七○メート

である。A1号墳とC1号墳とを比べると、後者は前者の半分の規模につくられている。 規模はよく似ている。 B1号墳の全長がA1号墳より短いのは、 前者の前方部が地形に制約されて短いため 例えば、ともに三

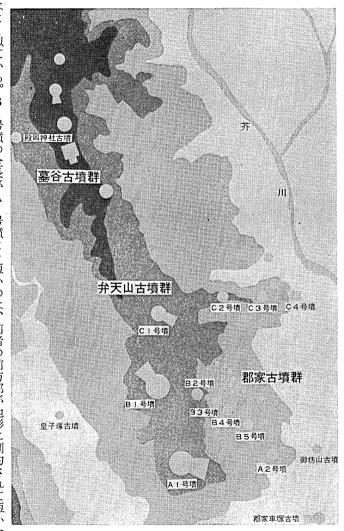


図110 弁天山古墳群

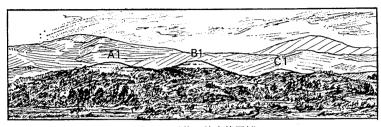


図111 三基の前方後円墳

そこで、この三基の古墳の立地条件を比べてみると、B有機的な関連があるようにみえる。 ような関係は偶然生じたものとは考えにくい。むしろ、この三 基 の 間

B1号墳

墳は四二メ

ル、C1号墳は二一メートルである。

段に築かれた前方部を備えているが、

その前面中段の幅を測ってみるとA1号

三基の古墳にみる、この

には、

えば、B1号墳の全長がA1号墳に比べて約二○メートル短いのは、 望見される対象物としての性格を、その属性としてもっているからである。 場合に、慎重に選択され検討されたに違いない。というのは、古墳そのものが、 石面は、 とする意図は、 両辺が等しくならなかったらしい。このように、見える部分を立派につくろう の前方部をつくるために、平野に面する東辺を殊更に尾根筋にあわせた結果、 反対に奈佐原の谷筋にあたる西辺は短くつくられている。 短いからであるが、その短い前方部もよくみると、平野に面した東辺は長く、 もっている。これに対して、C1号墳は、望見し得る地域が限られ、三者の中 墳 最も不利な位置にある。三者間にみられる立地上の優劣は、古墳をつくる 丘の属性 平野から見える部分は広範に、 C1号墳の墳丘でもみられる。 が最も高いところを占め、どこからでも見えるすぐれた条件を しかも立派につくられてあったが、 墳丘表面に葺かれた河原石の葺 狭い尾根の上に方形 前方部が 例 隠

れる部分では必ずしも同じではなかった。

輪の使用が一般化する傾向を考慮すると、この三古墳の時間的前後関係は、 ると、A1号墳のそれが型式的に先行する。また、B1号墳には、全く埴輪が認められないから、 得、後行するものほど、選択の条件は限定されざるを得ないであろう。事実、墳丘の表面を飾る埴輪につい の順につくられたと推定できる。 てみても、C1号墳には多量の埴輪が認められるのに、A1号墳では少量であり、 こうした古墳の属性に留意して、立地条件の選択の問題を考えてみると、先行するものが優位 な B1号墳→A1号墳→C1号墳 両者の壷形埴輪を比較す 後代に埴 条 件 を

を生んだ社会、 技術的側面 な表出をもその属性としてもっていることが知られる。尾根の結節点を選ぶということが、単に古墳築造の に従えているともいえる。 続する円墳群が尾根の下手へむかって、順次配列されるという共通性をもっている。それは円墳群を系譜的 古墳をつくる場合には、 三基の古墳は、 さきにみた、三基の前方後円墳の有機的関連を、このように、 からの帰結だけでなく、予めそうした系累上の墳墓地の選択をも前提としているとなると、古墳 いずれも脊梁部から東へ派生する尾根の結節点につくられ、しかも尾根上には、時間的に後 ひいては被葬者の性格にも、 先行する古墳が構成する景観上の制約を何程か考慮せざるを得なかったであろう。 前方後円墳について、さきに指摘した「見られる属性」のほかに、 同じような属性が伴っていたと推定される。 時間的に縦におきかえてみると、 さらに系譜的 後行する

方 Ш 後 現 円 弥生時代の方形周溝墓が、 くられる性質をもち、 なお、 成人・小児をも包摂する特定家族の墓であって、 ムラの共同墓地の中に営造されたことと比べるなら、 集落の 前方後円

壇を付設するという、

墳の立地 質しつつあった社会の動向にもとづくものであろうということは推測に難くない。 ちにみるように、 の方形周溝墓にみるように、 性質のものではなかったといわねばならない。 に成立した共同墓地のあり方は、依然、古墳時代にも持続したのであって、そこに截然とした区分を設ける にしても、 物を付加する形式の墓が誕生したことは、 ことは不可能である。そうした意味でも、 ・規模・ もはや溝を共有することはない。こうした、弥生時代後期以降の傾向が、その基底において、 以後の時代にあっても、 形態は、 歴然とした隔りを示している。 従来溝を共有して連接してつくる表現形態は失われてきつつあった。 まことに突然の出現であり、自然発生的にどこにでも発生し得る 唯一者のために隆然たる封土を築き、祭壇とみられる特殊な構造 ムラの共同墓地は依然、 たしかに、 集落の外辺にあり、 弥生時代後期の後半には、 しかし、 方形の墓が併列する かつて弥生時代 紅茸山遺 そしての

発生の前提には、 土木技術から生成したものであったろうか。さきにみた三基の古墳の形態上の有機的関係に、 や方位の測定などを含む、 Ш [を削 'n 土を積み、 技術体系をも含んだ新しいイデオロギーの流入があったことを想定せざるを得ない。 石をもって外表面を蔽い、 弥生時代とは異なった技術体系が介在した可能性も考慮するなら、 幾何学的整斉な形をつくる技術が、 はたして弥生時 前方後円墳の ある種の尺度

点をあげて強調することができるだろう。 きくなりつつある。その最も異なる点は、 前方後円墳が、 前代の方形周溝墓や同時代の共同墓地の方形墳と異質であることは、 誰しも強調する相違点にこそ、 死者を埋葬する共同墓地の「墓」と処を異にし、 むしろ、弥生時代の墓の研究がすすめば進むほど、両者の相違 前方後円墳の特異性があるのであって、そこには「墓」 他にいくつもの かも巨大な祭 柏 は

でおこなわれた儀式とは異なった、 特殊な儀式が存在すると考えるべきであろう。

墳 方 の 後 部 円 弁天山C1号墳を例にとって、のぞいてみよう。 いったい、前方後円墳の被葬者とは何者なのであろうか。まずは、 彼が眠っている施設を、

面も 溝状の凹みが掘られている。のち、この部分に木棺を納置するための用意である。また壙底や凹み溝の下底 底の中央には、南北方向に、長さ約一○メートル、幅約一~一・五メートル、深さ□○センチメート 達する墓壙を掘る。 交して、竪穴式石室一基がつくられていた。石室を設けるために、墳丘築成後、深さ約一・八五メートルに 後円部の、推定直径約一六メートルの墳頂部のほぼ中央には、墳丘の長軸の方向と五一・五度の角度で斜 四辺とも外方へいくらか張り出した胴張りのある長方形である。壁面の傾斜度は六〇度内外。 被葬者の足方向にあたる南側が、北側より約二○センチメートル前後低いことも注意をひく。 墓壙の底の広さは、 東西の幅が五メートル前後、南北の長さが一〇メートル前後であっ 平坦な壙 ・ル程

さ約二○センチメートルもの粘土を貼り、さきの木棺納置用の溝状凹みは、ことさら入念に貼りこんであっ 排水溝に通じる。幅約三〇センチメートルの排水溝中には拳大の磔をつめてある。 あったらしい。 の割竹形木棺である。 竪穴式石室の壁体の構築に先立って、墓壙壁下をめぐる排水用の浅い溝を掘り、西南隅で墓壙外へ抜ける 木棺は粘土床に残された圧痕から推定して、長さ約五・二六メートル、 被葬者を収容するために刳貫いた木棺の両端には、厚さ一○~一五センチメート その棺材は被葬者の頭辺に一部残存していたものから、 直径約八三センチメートル内外 コウヤマキであることがわ 一方、 ルの小口板があてて 墓壙底全面に、厚

■ 考古学からみた原始・古代の高槻

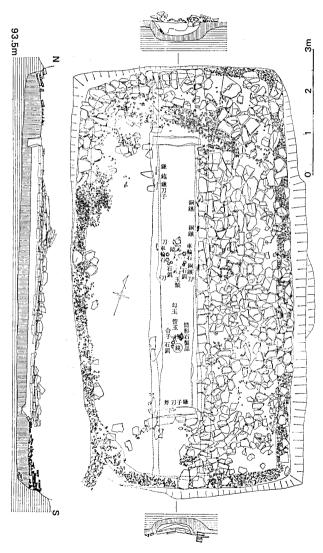


図112 弁天山C1号墳の内部主体

・〇メートル、深さ約六二センチメール以上(推定) この木棺を囲むように、板石をつかって、長さ約六・八メートル、 の空間をつくった。石室の壁面には、 幅は北側で一・一六メートル、 板石の小口部 南側で

で被覆したのち、大きな墓壙を埋戻したものである。唯一人の被葬者のために、 近づくに従って低くなる。石室上部は幾枚かの厚い平石を架け並べて閉塞し、 を揃えて平積みにし、約八〇度の傾斜をもって、上方に持送り、石室横断面はあたかも台形を呈するように つくられている。壁体の内部も平積みにした板石とその間につめられたバラスからなり、その上面は壙壁に その上面や壁体の上面 かくも重厚な施設を墳丘内

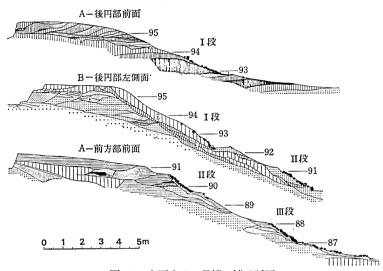
獣鏡一 に黒漆膜が付着していたのは、 玉を連ねた幾連もの頚飾りがあり、頭辺の左右には、碧玉製の腕輪が計七個あった。また足辺にも三角縁神 の様相は一変する。中国からもたらされた青銅製の二神二獣鏡、 に設けてあることは、他と区別される特殊性の最もよく表われた点である。 して頭辺におき、しかも中国鏡がより頭に近い位置におかれてあった。頚には碧玉製の管玉やヒスイ製の勾 キである点は、 画 碧玉製の腕輪二個、 辺 が、すでに特異な容器であるが、その材が弥生時代以来、棺材として用いられてきたコウヤ ついで、彼の身辺にいかなる器物が副えられてあるかをみてみよう。長大な木棺そ のも 在来の用材選択の知識を継承しているとみてよい。だが、棺内の副葬品をみると、俄然そ 太い管玉を連ねた玉飾り、碧玉製の合子や柄などが一揃いおいてあった。 黒漆塗りの鏡函に納めてあったのだろう。棺内には朱がみられ、頭辺一帯は わが国でつくった四獣鏡各一面を表を上に

が塗りこめてあった。こうした棺内外の副葬品のあり方もまた、ここに納められた人物が何者であるかを知 棺側では、 鋸・刀各 東側に銅鏃二九本が三個所に、鉄刀一振とともに副えてあり、西側には、 鉄製の鎌・刀子東側に銅鏃二九本が三個所に、鉄刀一振とともに副えてあり、西側には、 鉄製の鎌・カナ があった。 また棺の南小口板直下の粘土床中に、 鉄製の斧大小各一、鎌大小各一、刀子一

特に厚い

る鍵を与えてくれる。

する。 削った土は、 形の盛土作業を終った。そのやり方は前方部でも同様である。 外縁を決定する。その結果、 で、三対二対一の割合らしい。 円丘と方丘の接合部をくびれ部と呼ぶが、その部分は両丘を界する部位であるだけに、入念に削り出した。 に着手する際には、 たかどうかは知る由もないが、 きあがった傾斜面 から上方へ葺石を葺きあげ、 丘の各段は、 条件と完成すべき前方後円の一組の特異な墳丘を構築できる地形が選ばれた。そのため、卜占の儀式があっ くり山の そこから葺石を積みあげ、 Bブロックにみるように、 埴輪は墳丘部および上段下辺に主として配列されるが、その意とするところは、 IJ 方 丘の形をつくる盛土として利用した。 ほぼ計画された高さがあるらしい。それは斜面の長さの比が、上段・中段・下段の それ ぞれ 付設して方丘の祭壇が設けられなければならなかった。それには、さきにみたような選地 被葬者は単に墓壙を掘って納めたわけではない。 「の下辺には、 儀式があったらしい。 盛土の各層は内央にむかって傾き、 墳丘の斜面をかためる。その際、 幅一 土を積むには、まずブロックAをつみ、その上縁は当初においてほぼ円丘 盛土斜面に手を加えて中段に移り、 墳丘を築くにあたって、予め草を焼いた痕がみられる。また、 個 メート 一個入念に裏込めしていく様は、おどろくべき作業である。 後円部前面直下の地山上に、局部的に土師器が見つかっている。 ルほどの狭い平坦面ができる。 後円部の東側断面にあらわれたところによると、 その後、 各斜面の下縁には、 彼は修飾した円丘の中心におかれ、 摺鉢状の盛土面ができることになる。 最後にCブロックをおくことによって丘 河原石を小口積みにしながら、 この面にバラスを敷き埴輪を配 一きわ大きい根石を配列 墳丘の荘厳と聖域 墳丘の主要部 こうしてで それに 予め円



弁天山 C 1 号墳の墳丘断面

る。

それは全調査延人員の約八五パーセント

に相当す

掘調査のための延人員は、 入れなかったにもかかわらず、

約一四四〇人であった。

墳丘表面に費した発

約四〇〇トン、 方メートル、葺石の総量は約三○万個、その重量は 周辺から土をまかなった。その結果、墳丘の周辺に 約五○○立方メートルと算定され、その割合は五対 の盛土量は、約一〇〇立方メートルである)、削土量 なみに、東大阪市瓜生堂遺跡の弥生時代中期の方形周溝墓 スを加えるなら、さらに数十トンを要する。また、 - 坦地ができている。 である。墳丘部の削土量だけでは不足するため、 の古墳の盛土量は約二五〇〇立方メー このほかに平坦部や丘頂に敷くバラ 全斜面の表面積約一九〇〇平 ル は

結界であるらし

後円部表面の半分が地崩れしているために鍬

全長七〇メートルほどの小規模な前方後円墳であ

I 考古学からみた原始・古代の高槻

市域で集中するのが、 性 被 葬 者 の 丁重につくられた施設や華麗な副葬品のみならず、それを蔵する巨大な人工のつくり山 築をみるなら、この唯一の人物が只者でないことが知られよう。 この南平台一帯であり、 十指にも満たない数であることをみると、こうした墓の被葬 しかも、 同じような墓が、 図114 弁天山 C 1 号墳の墳丘築成 1 地山想定図 2 地山削土図 復元図 「の構

葺石やバラスを背負い、埴輪をかついで運ぶ様は、 かつての弥生時代の墓つくりには見られない光景 その比高二〇メートルの谷間 の小

径を、 であった。ここにもまた、巨大な労働力を一身のためにかり出し得る力をもった唯一者の姿をみることがで 埴輪の総数二○○個以上と推定される。芥川までの距離五○○メートル、

きよう。

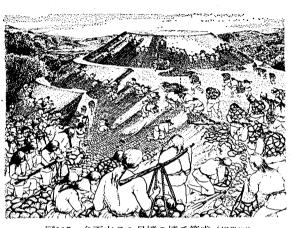


図115 弁天山C1号墳の墳丘築成(想像図)

想定できよう。

代の首長とは、

あまりにも異質である。

彼がもつ宝器の数

しげもなく、

をみるなら、そこには祭祀を司る特殊な役割をもった人間

われわれは彼を司祭者と呼ぶ。

しかも、

ったことがわかる。死後もムラ外辺の共同墓地に葬られた前

自己の身辺に財宝をおくことのできる人物であ

て柱をたて、由岐と須岐の殿屋を建てる所作の縁由をも示し図・刀子がおかれてあったが、それらの器物は、後代の天皇践弁 でもあった。彼の棺を納置する粘土床の中に、鉄製の斧や鎌邦 司祭者はその財物や力が示すように、現実には政治の主導者

新たな首長の誕生に際して最初にとりおこなわれた祭儀が、

前首長をおくる葬送の儀であったとすれば、

首

【変遷』『世界考古学大系』3 】 「小林行雄・近藤義郎「古墳の」。

のように、

首長の主宰のもとにおこなわれたのであったろう。茨木市福井の将軍山古墳では、そうしたことを暗示するか

おそらく古墳の築造にあたっては、いくつかの段階にわかれた荘厳な儀式が、新たな

赤色の顔料がふりまかれた面が、竪穴式石室の外辺で見つかっている

ているかの如くである。

数の人間の労働を自己一人の死後の奥城のために動員し、惜

結合したクニとも呼ぶべき広い地域に勢力をもち、しかも、

個のムラの首長ではなく、いくつかのムラを地縁的

者が一

■ 考古学からみた原始・古代の高槻

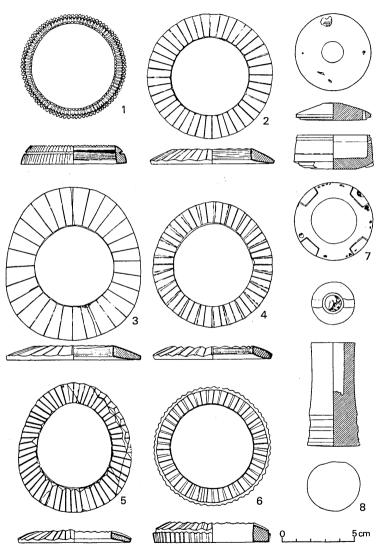


図116 弁天山 C 1 号墳の碧玉製品(1・6石釧,2~5車輪石,7合子,8筒形石製品)

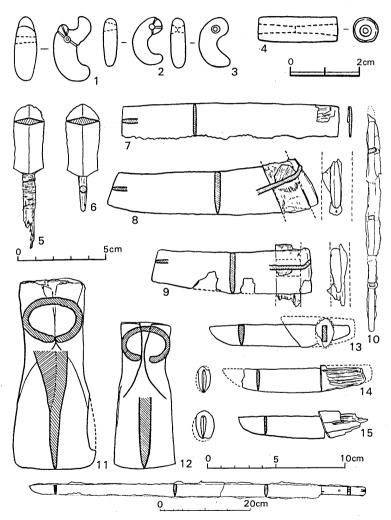


図117 弁天山C1号墳の玉類と鉄製品(1~3 硬玉製勾玉,4 碧玉製管玉, 5・6 銅鏃,7 鉄鋸,8・9 鉄鎌,10鉄鉇,11・12鉄斧,13~15鉄刀子, 16鉄刀)

П

説

いれるように、その時点で倭にもたらされたとするなら、倭人朝貢の泰始二(二六六)年をもって、

前方後円墳の外貌を説くところがあった[志倭人伝』。]。中国王朝の宮廷でおこなわれた南北郊二至之祀が 場所に埋納されたのも、 増大しつつあったと推定する。 うであればこそ、 んだ。その後、二六六年の西晋への朝貢も、おそらくその延長上におこなわれたのであろう。 倭王の称号を獲得し、その後、 らく三世紀の後半、 ることができよう。 を媒体とする瀬戸内海上権の掌握と、それを踏まえた活発な中国王朝との交渉などを、その一端としてあげ 後期の新たな銅鐸祭祀にみる地縁的結合や、 は何であったか。 をみると、 るわけに し得たのでは 進氏が晋書記載の の継承 前方後円墳の出現は、 į, ・復活の場として、 「なかったか。そういった意味で、これを単なる墓とし、 かない。そして、このような構造的記念物が、北九州や瀬戸内でなく、畿内で発展したところ 営々とした労働の奉献と、 いま、 「圜丘方丘」をとりあげ〔都に築く」『古代学研究』3)、近くは山尾幸久氏がこの記載にふれ、「圜丘方丘」をとりあげ〔井本進「前方後円墳を洛陽の)、近くは山尾幸久氏がこの記載にふれ、 約半世紀の間に一定の結末を得たと解する。二三九年にはじまる卑弥呼の朝貢は、 その基底には急速に高まった平地の農業生産や手工業生産がより組織化され、 ここでそのすべてを解きつくす余裕はないけれども、すでに弥生時代で指摘した、 新たな政治的体制の中に組織化されていった徴証なのであろう。 弥生時代後期の丘上のムラが一斉にひきおろされて姿を消し、 前方後円墳は一般の墓とは区別され、 数次の外交関係を重ねながら、 畿内の特異な政治的風土の中から萠芽したといえよう。その特異な風土と 灰陶系鉄文化の流入に触発された叩技法にみる独自性、 さらに埴輪の荘厳が一体となって、丘上に隔絶した空間を創出 急速に中国の文物を受容し、宗女台与におよ 被葬者を死者として一般化してうけと 聖域とうけとられていたであろう。 その動きは、 かつて、 銅鐸が僻遠の 飛躍的に 投馬国 おそ そ

前方

後円墳はその上限年代の一点を得たことになる。はたしてそうであろうか。

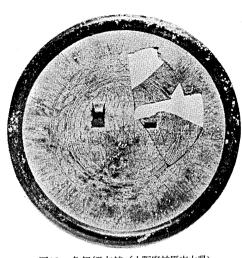
的にしたのであろう。 異性をあげずとも、 鏡の側からみれば、 共に、棺の中に埋められたけれども、後者の場合は銅鐸と共にその役割を終えたことになる。 る。 賀県と山口県の各一面は、 のほ 化していたことを示すのであろう。この鏡面が凹面であること、 あったことを示すとともに、 対する両地域の態度の違いは、 の地域と畿内では、同じ鏡に対する態度を異にしていることが知られる。前者の場合は、 伝 奈良県の例は銅鐸と共伴し、大阪府柏原市大県の例も墓ではない。こうしてみると、北九州や本州西端 かにも、 世 鏡 朝鮮半島でつくられた特異な凹面鏡である、 中国の漢代の鏡 って、他の文物とともにわが国にもたらされていたことは、よく知られている。 この鏡が流入した時点が、古い銅鐸祭祀の時期であったことが、この器物の性格を決定 特定の個人の所有物であったか、ムラの共有物であったかという相違になる。 弥生時代の墓から見つかった。他の二面は、奈良県と大阪府から見つ かっ て 北方糸の護符的な機能が畿内では共同の祭祀である銅鐸祭祀の器物として一体 この鏡がもたらされた弥生時代中期に、すでに異なった風土が醸成されつつ ――例えば「方格規矩鏡」や「内行花文鏡」 多鈕細文鏡が、すでに四面もある。そのうち、 鈕が片方に偏して懸垂し得ることなどの特 — が、 古墳時代の開始に先 鏡の保持者の死と この相違は これらの鏡 この鏡に 立

ていた事実」、福岡県銚子塚古墳でも仿製鏡八面と区別して、伝世の 長宜子孫内行花文鏡および 鍍金方格規 面 1の鏡が棺外におかれていたのに対して、 ところで、 小林行雄氏はかつて、 茨木市宿久庄紫金山古墳で、「三角縁神獣鏡を主 とする 伝世された方格規矩四神鏡一面のみは、 棺内の遺骸の傍におかれ あたらしい

首長の死にあたって、この首長の存在をより高めるために、はじめて古墳を作り、

しかも宝器の伝世を絶っ

I



写20 多鈕細文鏡(大阪府柏原市大県

山C1号墳でも、

葬者の頭辺に最も近くおかれていたことは、この指摘の正

しさを認めてよいであろう。

氏は、古墳から発見される漢中期の鏡が、二・三世紀に

れた

当時にも伝世品として区別してあつかわれたことを指摘さ

【林』三八一一『古墳時代の研究』所収 】 たしかに、弁天(小林行雄「古墳の発生の歴史的意義」『史》。 たしかに、弁天

中国製の二神二獣鏡(西晋の鏡か)が、被

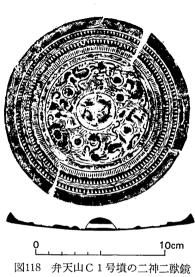
鏡が二・三世紀にわたって伝世しただけでなく、

古墳築造

出土の方格規矩四神鏡の磨滅を例証として、漢中期の中国矩四神鏡の二面が頭辺にあり、また、香川県石清尾山麓古墳

的なものであったからであろう。」と推定し、古墳の造営者らは「伝世の宝器を 保持しつづけたある司祭的 たとえば神宝ともよびうるような、 わたってわが国で伝世されたのは「その鏡の使用目的が、 伝世を必要とする祭祀

ない必要がなくなっていたからであろう。一言にしていえば、 ることをあえてしたのである。このような現象のおこりえた理由は、 てこれを副葬品のうちにくわえることによって、 つくべき首長にとっては、 もはやそのような旧い形の聖性の付与によって、 かれをかくも権威あらしめた聖性の根元を、そこに棄て去 権威の形式が革新せられたのである。」とさ 死者にかわって、あらたにその地位に その権威を保証せられねばなら



同 笵 鏡 三面の鏡のうち、足辺にあった三角縁 弁天山C1号墳の竪穴式石室にあっ

た

な提言であった。 古墳の発生に関して、 恒常性の外的承認」と表現するものであった。

これ

従来みることのなかった画期

してとらえ、その権威の内容を「世襲的首長の地位

「古墳の発生を 貴族の権威の革新の

象徴」

لح

の

前方部の幅約三三メートルという大きさは、弁天山C1号墳の規模に近い。 製の三角縁神獣鏡五面のほか、 東北部にある丘陵上につくられた全長約七三メートルの前方後方墳である。 犬山市東之宮古墳(瓢箪山古墳)にある〔財――東之宮古墳出土品一括」 鏃六本、 前方部に一個所の埋葬施設があり、そのうち発掘した後方部の竪穴式石室から、 石釧三個、 刀子一本といった多数の副葬品が見つかった。そのうち一 車 輪 石 個 方格規矩四神鏡一 勾玉三個 管玉二三〇個、 画 三獣鏡一 神獣鏡は、 鉄製の大刀七本、 画 」『月刊文化財』一四一 】 この古墳は、「国で保有した埋蔵文化」。 この古墳は、 同じ笵(鋳型)でつくられた鏡が、 四獣鏡四面、 個の碧玉製合子や石釧などは、 後方部の一辺約四〇メートル、 東之宮古墳には、 剣三本、 碧玉製の鍬形石一 例の同笵鏡を含む中国 槍一 九本、 後方部に二個 個、 犬山市 愛知 斧類. 県 0

所

山C1号墳のものと似ている。

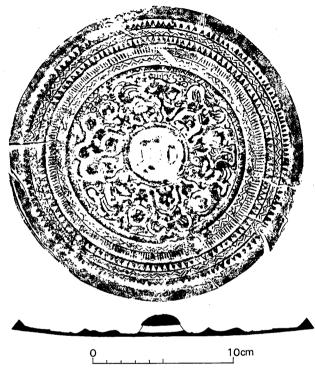
本

を

れた。 見出し、

それは宝鏡の伝世を絶つことに歴史的な意義

■ 考古学からみた原始・古代の高槻



かった。

いずれも、

仿製三神三獣鏡であって、

東京国立博物館に所蔵され、

八四六八号は「土室字阿武山松林内

とある。最近わかったことだが、

焼山から、

かつて二面の三角縁神獣鏡が見つ

同館目録に八一一四号と八四六

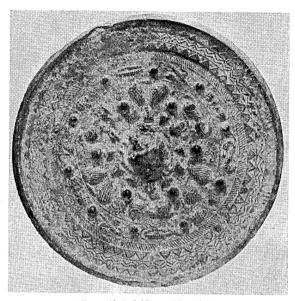
また、

現在大阪阿武山赤十字病院の病棟がならぶ丘の南端、

八号の番号がが付されている。八一一四号は「土室字阿武山」とあり、

図119 弁天山C1号墳の波文帯三神三獣鏡

が、 れた。 当時二面とも博物館で買いあげて 四号鏡を見つけ、翌年八四六八号 この二面の鏡は、大正初年、土室 もらったという。音吉氏の子息に 鏡を同じ場所で見つけたもので、 の松井音吉氏(故人)が、八一一 円墳か前方後円墳か明らかでない 棟を建てた際削られていたけれど 案内してもらったその場所は、病 ころから、 今後調査すべき古墳である。 墳丘の一部や埴輪片が認めら その丘が焼山と呼ばれると 焼山古墳と命名した。



写21 焼山古墳の三神三獣鏡

ことは、どういうことを示しているのであろう 墳の場合は佐賀県や滋賀県の古墳にあるという 天山C1号墳の場合は岐阜県の古墳に、焼山古

このように、同じ鋳型でつくられた鏡が、弁

か。この同笵鏡の問題を、精力的に追求されつ

つある小林行雄氏の論考をつぎにみてみよう。

小林行雄氏は中国製の同笵鏡をとりあげ、そ

首長権の世襲制の発生という内的要因のみでなく、その外的要因をくわえて、大和政権による承認をともな 神獣鏡のうちに、大量な同笵鏡があることについて、大塚山鏡群のかつての所有者が、各地の首長に対して った」首長の出現と解することにつながる。そして、魏の鏡が輸入されてから、各地の古墳に副葬されるま 自己の管理する同笵鏡を分与したと推定した。そのことは、「地方における 古墳の 発生の原因を、たんなる る大塚山古墳にあった、三二面をこえる三角縁

に分布し、しかも京都府相楽郡山城町椿井にあ れが北九州から関東におよぶ各地の古墳に広範 佐賀県谷口古墳や滋賀県天王山古墳に同笵鏡が

この二面の鏡のうち、初めに見つかった鏡は、

は、 年頃にはすでに輸入されていたものと推定した。また仿製の三角縁神獣鏡にも多数の同笵鏡がみられるとこ 載がみえる。 ある種の権威を認めて、そのまま特殊な用途に利用した形」である。それに対して、 作せられた仿製鏡の所有ならびに分配にも参加したあたらしい型の所有者」とがあったこと、そして古い型 に終始した古い型の所有者と、これにくわえて、それ以後あたらしく輸入せられた中国鏡や、 には絶無で、 代差としてあらわれることを、 部分が中国製三角縁神獣鏡からなる古い相のものと、仿製鏡をまじえた新しい相とに分ち、両相が古墳の年 れた段階を推定し、中国鏡と仿製鏡との配布は中心を異にしていたと推論した。そして、伝世鏡のほかは大 として、三角縁神獣鏡の輸入と配布の段階、 三角縁神獣鏡の一群」だったと考えた。その根拠に、鏡式が限られ、 ろから、 でには、 とは「中国からあたえられたものを、そのままうけとっている型」であり、「中国からあたえられたものに 魏から大量の鏡が輸入されたことについては、 細部に他の鏡式の手法が混用され、鏡径も大小任意で、むしろ大型鏡を作ることへの努力すらみられる 同笵鏡がしばしばみられることをあげている。これに対し、方格規矩鏡や内行花文鏡を模したもので 仿製鏡をもとりあげ、「古墳発見の仿製鏡のうちで、畿内において 最初に 大量につくられたのは、 少なくとも半世紀以上の年代の開きがあると推定している〔か意義」『史林』三八一 〕 氏はこの鏡一○○面が、主として三角縁神獣鏡であったとみて、大塚山古墳の鏡群は、二五○ 新しい相のものに伴りこと、そこから「三世紀中葉に輸入せられた中国鏡の所有ならびに分配 碧玉製腕飾類で検証した。その結果この腕飾類は、 仿製三角縁神獣鏡の製作と配布の段階、他の鏡式の仿製鏡が作 魏志倭人伝に、さまざまな賜物とともに銅鏡一○○面の記 他の鏡式の手法を混用せず、鏡径が 古い相の鏡群をもつ古墳 あたらしく製

新しい型は「仿製鏡や

え、 に、近接してもとめられる」とのべた【都大学文学部五十周年記念論集』『古墳時代の研究』所収】 を蔵した古墳の営造期を、 も異にしていたと考えた。 物にある権威を認めた段階であって、 よって、さらにこれを細分し、編年的考察に 導くことが 可能で ある」と して、「三角縁神獣鏡の輸入期」、 である」とした。また「仿製鏡や碧玉製腕飾類をもつ古墳は、仿製鏡の型式と腕飾類の型式との組合わせに たような器物を生産し供給する機構をもった、 碧玉製腕飾類のように、 「その配布期としての古い相の鏡群の成立期」、「それを蔵した古墳の営造期」の三つの時期を区 分 して 考 新しい相の鏡群を蔵した古墳の営造期におけるその性格を、 鏡の輸入から古墳の営造までの間に、 自分の力でつくり出したものをそれにくわえた型」であり、 「邪馬台国的な文化活動の中枢が、大和政権的な 文化活動の中枢へ そして、古い相の鏡群の成立期における文化活動の中枢の性格を邪馬台国的なも これに代る器物を製作し得た段階に先行するとともに、 鏡の配布期をやや幅広く考え、その配布期は中国から輸入した器 あたらしい文化活動の中枢に、 大和政権的なもの、そして、 かれらが直結したということ 「権威の 活動の中枢 移行する時期 古い相の鏡群 象徴となりえ

区に神像二躯、 東方型の分布

(2) (5)

または獣形二個を配してあるもの)であり、

(5) 中部

関東の五地区に分けた。その分布をみると、まず⑴と⑸とにわたる分布を示すものがないこと、

を示すものは三角縁複像式神獣鏡類(鏡の内区を乳で四区に分けられている場合に、

西方型の分布を示すものは三角縁単像式神獣鏡類(一

墳との間に同笵鏡を分有する一六基の古墳に、

中国製同笵鏡を分有する古墳をも加え、

計三六種九五面 (4) 近畿

の 同 初期の大和政権の勢力圏を考え、

大塚山·

各鏡式を一○種に分つとともに、

(1)北九州、

(2)中国・近畿西部、

(3) 畿内、

東

部

かくして、三角縁神獣鏡の分布状態を検討することによって、

でひろげられる。これは少なくとも四世紀にはいってからのことであった」と推論した[の勢力圏]『史林四〇―でひろげられる。これは少なくとも四世紀にはいってからのことであった」と推論した[小林行雄 「初期大和政権 囲に達したことが判明する。 は、 投影しているとした。したがって、西方型の鏡の全体の分布状態から、京都府大塚山の首長による初期の配布 方型分布圏を西方文化圏と解し、中央型分布圏は西方文化圏の初期の状態を反映し、大塚山の首長を通じて 区に神像一躯と獣形一個を配したもの)であって、 ておこなわれたということである。それを三世紀後半の現象とすれば、三世紀後半における畿内の政治勢力 なされた段階、即ちほぼ四世紀初頭までの状態を示し、西方型の分布圏は、その後、四世紀後半までの結果を かったということができる。 を復原し、「三角縁神獣鏡の配布の初期の段階においては、まずその配布は 畿内から 北九州の範囲にわたっ 西方は福岡県・大分県などの北九州の一部におよんでいたが、東方に対しては著しい伸張をみせていな 中央型として類別される吾作銘複像式神獣鏡類の分布を介して、これと近似した分布を示す西 これはほぼ三○○年頃の情勢であろう。ついでその東辺は、一 同笵鏡の分布からみれば、やがて畿内勢力圏の東辺は岐阜県・愛知県を含む範 東西の地域差を生じた原因の一つが、 鏡式の相 躍して群馬県 違に よるこ

の研究』所収」の四『古墳時代]。 同笵鏡の分有関係を追求することによって、

氏の研究は高く評価されねばならないであろう。それだけに、その成果の一端にふれたこの項が、氏の真意 を正しく伝えているかをおそれる。

初期の大和政権の政治的動向をヴィヴィッドにとらえた小林

平地

の ムカラ 方では、 初期大和 古墳成立期前後に、どのような状況が展開しつつあったのであろうか。まず、その 政権の中枢 をなす畿内、 それに深い関りをもったであろうと考えられるこの三島

を川西遺跡にきいてみよう。

えたあと、 ころのいくつかのムラをのぞいてみよう。 絶えて丘の上に住居をみることはなかった。 紅茸山遺跡や塚原遺跡のように、 平地で何がおこったのであろう。 かつて丘の上にあったムラが消 この間のいきさつ

低くのびる丘の背の土くれのあるところに営まれることになった。 は掘りやすい。しかし、少し草の生え具合の違う小石原は難儀だ。そうしたこともあって、 は、 接的に利用したのであろう。 こみ、まるで、掌を東にむけてひろげたような起伏の多い土地であった。 けわしい山間をぬけて、 のだろうが、やがて、人口の増えるにしたがって、ムラへ流れこむ北の谷筋の水や、 れている。 ように、 り、やがてそこから思うざまに東南流した。そのため川西一帯がやや高いこともあって、東の安満のムラの 弁天山からみえる三島の沃野はひろびろとしている。その脚下にみえるのが川西のムラである。 ずいぶんのちのことである。低くひろがる尾根のうえには、方形周満墓がある。黄色い粘土層のところ 水の厄に遭うことはなかった。このムラが誕生したのは、 富田磔層と名付けられた小石のごろごろした後背地に、低い凹地が東の川筋からいくつもはいり 弁天山の丘の裾を削って流れる芥川は、 芥川の低い水流は彼等には無縁であった。その水を田にひいて利用できる 東へ張り出した尾根にさえぎられて東へ曲 いま、この起伏は水田の下にかくれてし 弥生時代中期の初め頃であったと推定さ はじめはこの凹地の沃土を耕した 西の女瀬川の水流を間 ムラの墓地は、

Ш 西 [遺跡の調査が始まったのは、 皮肉なことに、 弁天山古墳群の発掘よりずっとあとのことであった。 そ

実はこうした低い尾根と谷とがいりくんだ複雑な地形と、人の営みを蔽っているのが、現在

川西

この水田

地帯である。

まっている。

は なったのは、 あまり問題にされなかったし、また知りようもなかった。 問題が異なった関心から提起されたからであった。 川西のムラのあとがいくらか知られるように

のころまで、

古墳を掘ることはあっても、

それらの古墳を支えた平地のムラがどうなっているかということ

ことになる。 られたことがあった。ひろがる水田の中に、一際茂る樹林は今でもある。 て計画的に調査されたものではない。 て、弁天山古墳群を支えた中核的ムラの探査や郡衙成立の歴史的背景の究明といった、それ自身の問題とし の生徒たちの営々たる努力をもってしたにもかかわらず、八世紀の遺構のあるらしいことを探査したのみで この土地には郡家というところが近くにある。 その後、 神郡社の南で社宅建設に伴って土器が大量に出ているときいた。 それゆえ、これから述べる川西遺跡も、その作業の副次的な成果としてあらわれたものであっ この遺跡は島上郡衙と芥川廃寺という二つの遺構群の所在確認という作業の中におかれる かつて丘の上で、 藤沢一夫氏にあそこが芥川廃寺だと教 たまたま、一九六五 その春の調査は、 府立島上高校 (昭和四〇)

満に始まったことは事実だが、 る芝谷遺跡や真上・慈願寺の諸遺跡と無縁であったとは思えない。 弥生時代になってからは、 文時代の遺物の濃厚な散布をみることが明らかになってきた。ここは古くから人が住んだ所である。 にむかって低くなる。 西遺跡は広い。 東西 北の郡家本町のある丘陵部は、 先述のように、 キロメート 中期初めには早くもこの川西のムラが誕生した。 ル、 中期以降の痕跡がある。 南北 五キロメートルもあろうか。 辻本充彦君のたゆみない探索の結果、 この中期のムラの存立が、 この高槻における農業の開 その時以後、 北に小高い丘を負い、 先土器時代や縄 三島東半部 始が、 指呼の間にあ 最

られる。

域的な連関はこの二○世紀にも遠く及んでいるとみ

ムラを核として展開するようになる。そしてその地

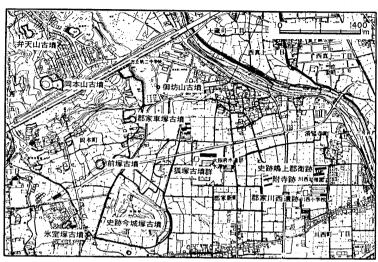


図120 郡家川西遺跡とその周辺

その住居は四本柱で屋根を支え、 同期 西 こうした住居が、どのような機能をもったものか明 さ約四五センチ 5, の南縁に方形周溝墓や土壙墓があるのは、 道までの南北約七○○メートル、 なものではない。 立の直前のムラが認められるけれども、 さて、 へ約四○○メートルぐらいの範囲であろう。 この範囲のなかほどに、 般成員の共同墓地であろう。 の住居跡がいくつかあった 先述のように、起伏の多いこの地域に、 前置きが長くなった。 ر ا 北は阿久刀神社から、 ۴ ル の方形竪穴住居をはじめ、 一辺約八メート Ш 【跡発掘調査概要Ⅱ』】、 大阪府教委『嶋上郡衙」。 中央に炉がある。 弥生時 代後 東は芥川沿岸 西 帯の話に戻ろ さほど大き 南は西国 このムラ 古墳成 ル 期 から ム 深 ラ 街 K

芥川沿岸の川西の二つの平地

桧尾川沿岸の安満、

I

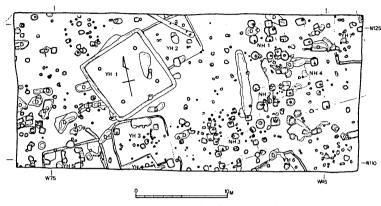


図121 郡家川西遺跡の方形竪穴住居

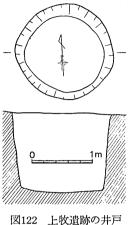
けではない。 落を構成する住居が、 だろう。それらは、後の条里の方向とほぼ四五度ふれている。 たようにみえる。 約一メートルの二本の溝が直交し、あたかも方格の地割があっ で調査したところでは、古墳時代前期の段階には、 に平行し、あるものは直行するかのようである。 ころに特色がみられる。こうした住居群が集落内での階層差を るようなものではなく、小さいなりに一つの群れを構成すると とは判らない。 たって全面的な調査をおこなったわけではないので、 の浅い溝を掘っている。その溝の方向は、 示すものかどうか、今後検討すべき課題である。 ル、深さ五〇センチメートルの溝と、 このころ、さかんに集落の内部や外縁に、 の小さい竪穴住居が数基あつまった状態であらわれる。 しかし、そのあり方は、大きい竪穴住居に付属す しかし、 この水路は桧尾川の水を田にひくためのもの このような小竪穴のみに限られているわ 安満遺跡の東辺〔遺跡発掘調査報告書』、 幅約四メートル、 あるものでは等高 幅一メート 広い範囲にわ 幅約二メー 確実なこ ル前後 深さ 集

らかでない。ところで、その次の段階になると、一辺約二メー

こなわれた可能性は十分にある。

溝 れているのをみると、古墳時代前期の水路を踏襲したのかもしれない。 跡の西辺では、 の断面は逆台形を呈したり、U字形であったり、一定していない。これより約一キロメー 六世紀になるともっとりっぱな溝がつくられるが、その方向も、 前期以降、 条里の方向と四五度ほどふ 局地的な方格の地割がお ۲ ル西、 安満遺

戸のようにも解される。 もので、 直径一・六メートルの円形素掘りの井戸である。深さ一・三メートルで灰色砂層に達している。 かとも推定される。この井戸は、 からなかったが、井戸の内壁と埋土の間に黄灰色砂質粘土があったところをみると、 川西遺跡や上牧遺跡〔跡発掘調査概要』〕では、古墳時代前期の井戸が見つかっている。上牧遺跡の井戸は、 その住居の西にも一辺約三・五メート 一辺が約三メートルの方形竪穴住居の南約六メートルのところに掘られ ルの方形竪穴住居が並列し、 あたかも二基の住居のための井 ある種の枠材があった 枠材は見つ



れ

ムラの

南には中小の河川の水流を利用することによって潅

漑可能な低地がひろがっている。

さらにそのむこうには、

茫

古墳時代前期のムラと推定される三島地方の主要な遺跡を東から順にあげてみると、 上牧遺跡の井戸 太田 やがて山陽道となり、 ト さらにいくつかムラがあるだろうが、これらを結ぶ道が、 ・郡といった具合に、北の山裾に沿って、 の間隔でならんでいる。 西国街道になったのであろう。それぞ この間には、 上牧・安満 真上遺跡のよう ほぼニキロ Ш 西

ı 図123 東奈良遺跡の大溝と 鳥陵 要查概。 1 V る。 ŀ

南 約二キロ 現在の国道一七一号線の通るラインを南へ越えた程度であろう。 メ 1 ŀ ル のところにある東奈良遺跡では、 幅一〇メートル、 深さ三メ 1 ŀ ル の二段

掘りの大溝が、

長さ二〇〇メー

۲

時の水田

の南限は、

郡 遺跡 Ő

氾濫原には手が出なか

つ

たらしい。

大部分のムラは依然として、

れよりもむしろ低地の可耕地を求めて移り住む傾向がある。

漠たる淀川の氾濫原がある。

もはや人々は、

弥生時代のように、

上牧のムラはその一例であろう。だが、

淀川 た。

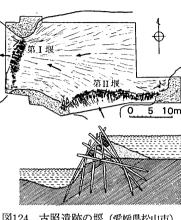
丘の上へ移り住むことはしなくなっ

前代以来のムラの場所を踏襲している。

当 の そ

ル以上にわたって判明しているが、その全長はさらに延びると予想されて 明会資料』他」。奈良遺跡現地説)。 やくも人工的な運河の掘さくが始まっていたといえよ やがて末端で茨木川に合し、 ル余の丸木舟の残骸があった。 また、 ある大溝には、 淀川に通ずるのであろう。 幅七五センチメートル、長さ三・五メ ムラの外辺に掘られた大溝 5 ここでは (調査会『東京良遺跡 は

世紀に開掘された可能性のあることが指摘されている〔大阪府教委『古 状の遺構がある。 大阪府南部にある羽曳野丘陵の東縁から北縁にかけて、 (日本武尊陵) この地域は著名な古市古墳群のあるところである。 に比定されるものだが、 この謎の大溝渠は、 の西にある長池の北縁から北走する南部西支溝渠 発掘調査の結果、 一説では仁徳紀一四年の、「感 四世紀末から五 長大な溝 大溝は白



長は二キロメートルをはるかに上回るであろう。幅員約二○メ 支溝渠はさらに西北へのびるともいわれているから、その総延

ルの大溝渠の両岸には堤を築いてある。この大溝渠建設の

1

活文化史」!]。 古墳の造営や水田 の開発と密接なつながりをもって、 れは東奈良遺跡の大溝でみた土木の工事が一層大規模になり、 おこなわれるようになったことを示して いる[原工三

の資材運搬や潅漑の目的で、 意図はなお明らかでないが、

掘開された運河なのであろう。そ おそらく巨大古墳の造営に際して

遺跡では、川の合流点に近く二つの堰を設けていた〔書』松山市文化財調査報告書4〕 一つは全長約一 三 メ たというから、 上に横木をおき、それをとめる杭を密に打つ。 一段・三段と上方へ高くしてゆく。 古墳時代前期になると、 他は約二四メートル。まず下流側から上流にむけて斜材を約五〇センチメー 一見簡単にみえる堰でも、 溝や小河川の水流に杭を打ちこみ、横木を組んで堰や梁をつくった。 一つの堰には約五五〇本、 その構築には多大の労力を費したであろう。 隙間にはオギ・ 粘土・磔をつめた。この手順をくり返して、 他の堰には約六五〇本もの杭が用いられてい ŀ ル間隔で打ちこみ、斜材 類似の遺構は、 愛媛県古照 1

走

する 中部支溝渠(八二〇メートル)、

さらに西へ屈折して仲哀陵 それらが合してさらに北

その北で合する南部東支溝渠、

の南沿いに走る北部支溝渠(五九〇メートル)にわかれる。

I

学研究』 六五 〕。 古墳時代前期には、すでにさまざまな 堰の構築法があり、の調査」 『古代〕。 古墳時代前期には、すでにさまざまな 堰の構築法があり、 他へ分水する技術が現今とかわらない程に発達していたことが知られる。分水や集水の施設が各地にみられ に、長さ一・二メートル以上の矢板を密に打ちこんでつくった 集水マス様の 構造物さえあった [良県纒向遺跡 うした遺構は見つかっていないけれど、水田の経営がいっそう高度になりつつあったことは推察 に る背景には、 市利倉遺跡や八尾市中田遺跡でも見つかっている。 当時、 急速に拡大する水田、とくに乾田の大量な出現があったのであろう。 また、奈良県纒向遺跡では、 小河川の水位を人為的に高めて、 幅六メート この三島では、 ル余の溝の両岸 難く

る。 5 ψ 安満と川西の二つ、 るわけにはいかない。もし二つの地域をとりあげるなら、弥生時代こそ、それにふさわしいであろう。 を東西に両分し、 Ξ しかし、 東は天神山に、 銅鐸を用いる祭祀が、具体的にどのような祭祀だったかはわからないけれども、この地域に銅鐸のあら 銅鐸が埋納された丘と、 その近傍のムラに結びつけてよいなら、 た ち の これをもって、ただちに古墳成立期の地域的結合の範囲が、ほぼそうした大きさであったと解す れた。 弁天山 C 1 号墳がつくられたころ、 のちに島上・島下と呼ばれ、 西の地域では郡と東奈良といった具合に、それぞれ中核となる二つのムラがある。 西は吹田市別所センブにあったのと二つの地域は対応している。 それらは佐保川と勝尾寺川の合流点に近い。この古墳群と弁天山の古墳群は三島平野 初期の王墓が出現する丘は両地域とも異なっている。もし、古墳の被葬者の出 高槻市と茨木市の行政的地域の原型をなしているようにみえ 弁天山古墳群の被葬者は、 茨木市宿久庄や福井の丘の上にも同じような墓がつくら 丘麓の川西のムラの首長であろ しかも、東の地域では、 しか

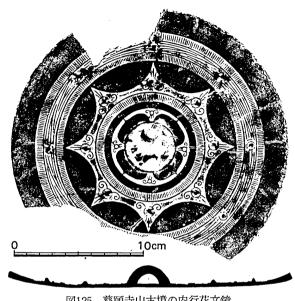


図125 **蒸願寺山古墳の内行花文鏡**

田は、

依然泥湿のところであって、生産性の低

たのではなかろうか。

しかし、安満のムラの水

祭祀を保守していた集団は、安満のムラであっ 時代後期に突線鈕四式の銅鐸を入手して、 であった可能性がつよい。もしそうなら、

いところである。

しかも安満のムラは、

後期後

の

たのであろう。そういう状況のもとで、血縁的結合や擬制的結合の象徴として命脈を維持してきた銅鐸の祭 新しい政治的権威による保証という新たなイデオロギーとその賜与物が到来したとき、 倭の女王が中国の皇帝に対しておこなったような、 倭王と地方首長の間でも国内版としておこなわれたのであった。いまやそうした朝貢 差は、弥生後期の段階に大きくなりはじめてい 朝貢による権威の賜与という国際的な首長間 色あせたもの

る。そこから、二つのムラの経済的・社会的格 小水流によって、一躍乾田化しやすい条件にあ がある。それに比べて、川西のムラは女瀬川 半には東・西・北の小集団に分立していた形跡

祀は、 になった。

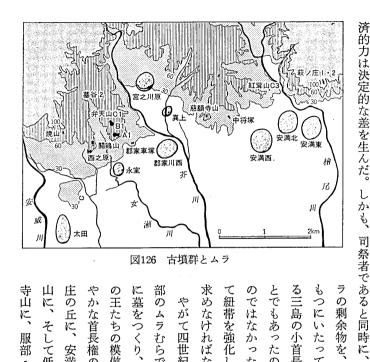
の政治的結合形式は、

その祭

われる意味を既述のように解するなら、

母集団の主宰によっておこなわれた祭祀

I



やがて四世紀末から五世紀の前半にかけて、三島の山麓やがて四世紀末から五世紀の前半にかけて、三島の山麓をでもあったのである。だが、この結合形式は安定したものではなかったらしい。その最大の欠陥は、絶えず朝貢して紐帯を強化し、倭王の新立のたびに、その権威の保証を求めなければならないところにあった。

と賜物によって結合する形式が流入し、

般化し始めたとき、

1、現実の政治的支配者でもあった首長は、ム価値高き銅鏡や碧玉製腕飾類を入手し得る経

寺山に、服部・宮之川原の首長は西の墓ケ谷に、氷室の首の王たちの模倣であり、かつて彼によって保証されたささやかな首長権の誇示であった。安満東のムラの首長は菸川庄の丘に、安満北の首長は紅茸山に、安満西の首長は菸川市のムラでり、彼の権威を誇示しはじめた。それは、初期部のムラむらでも、新たな装いをこらした首長が、丘の上部のムラむらでも、新たな装いをこらした首長が、丘の上

第三章 王墓とその時代

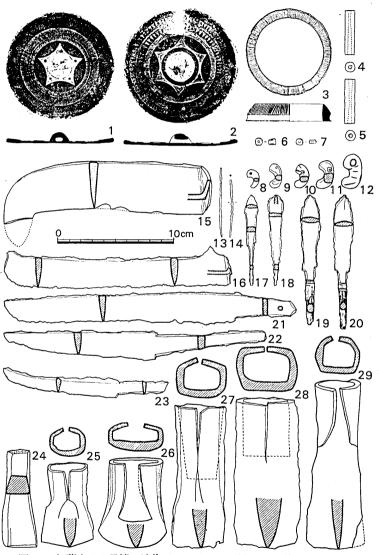


図127 紅葺山C3号墳の遺物(1・2鏡,3石釧,4・5管玉,6ガラス玉,7小玉(滑石製),8~12勾玉,13・14鉄針,15鉄鎌,16鉄鋸,17~20鉄鏃,21鉄刀,22・23鉄刀子,24砥石,25~29鉄斧)

■ 考古学からみた原始・古代の高槻

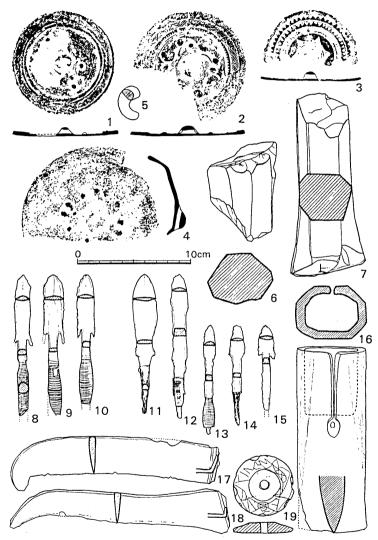


図128 奥坂古墳群 (1~7) と紅茸山古墳群 (8~19) の遺物 (1~4 鏡,5 勾玉,6・7 砥石,8~15鉄鉄,16鉄斧,17~18鉄鏃,19紡錘 車(碧玉製)(8~10紅茸山20号土壙墓,11~16・19紅茸山C8号墳, 17紅茸山C6号墳,18紅茸山C11号墳)

長は闘鶏山にといった具合に、それぞれ平地のムラと対応して首長墓がつくられていった。 治的基盤が、小規模であるからであろう。 いずれも小規模であり、副葬品も初期のものに比べれば見劣りがする。それは被葬者の依ってたつ経済的政 10 cm それらの古墳は 5 図129 鉄剣 $(3 \cdot 4),$

第二節 大王の世紀

約二・六メートル、 ら 尾 根 ぶ [= な 墓 弁天山C1号墳のその後はどうなったのであろうか。その後継者に該当するとみられる人物 の埋葬施設を、前方部でみてみよう [墳」『弁天古墳群の調査』大府報17]の埋葬施設を、前方部でみてみよう [原口正三・西谷正「弁天山C1号]。 深さ約七○センチメートルの墓壙を墳丘主軸に直交させて掘り、水平な壙底は地山上に 南北約 六メートル、東西

ある。壙底中央やや東寄りに、長さ約五メートル、

幅約一メートルの範囲に、断面台形になるように粘土を

鉄刀 5), 鉄矛(2)[1 5塚原G2号墳,2天 3紅茸山C8号墳, 4 紅茸山C 3 号墳]

ろう。 がら、 級的な社会の支配層としての姿がある。 うである。いまや、 けれども、同じような構造の簡素なものであった。あるものでは夫婦とも思える二棺一組が併置されてあっ 同じような構造のものであった。この尾根の東端の一基になると、粘土の被覆さえあった か 疑 わ があったことを示している。竪穴式石室をつくらず、長い割竹形木棺を粘土で被覆する簡単な葬法は、 北側には土師器の小形丸底坩二、壷一が一括しておかれ、被覆粘土中で鉄片二を検出した。また、壙内バラ 隙に粘土をつめ、その外周にバラスを敷き、再度、粘土をもって棺全体を被覆する。かくして、墓壙を土で 敷く。この上に、長さ約四・五メートル、径約四○~五○センチメートルの割竹形木棺をおく。 なっても、 から内へ三〇センチメートル入ったところに、中仕切板があったらしい。 般化した葬法である。また、その棺内の副葬品をみると、後円部被葬者と同じように筒形石製品をもちな まさに、このあり方は、 B1号墳やA1号墳でも、そこから東へのびた尾根上に、類縁者たちの墓がつぎつぎに営まれていった この変化は、 他はガラス小玉のみである。このあと、後円部の石室に重複してつくられた一基の埋葬施設もまた、 埴輪片が混入していた。この埴輪は、後円部の被葬者の埋葬儀礼のあった後に、この前方部の埋葬 棺内には赤色顔料が一面にひろがり、中央近くに碧玉製筒形石製品一、ガラス小玉六があり、棺外 依然として、 かつての首長が権威を誇示した姿はみられない。それは「墓」と呼ぶにふさわしいであ 遅かれ早かれ、さきにあげたムラむらの首長層にもあらわれる。ただ、そういう段階に ムラの共同墓地とは区別された場所に墓地を定め、墓を営みつづけたところに、 かつて丘の頂きに選地した首長につらなる一族の系譜をあらわしているかのよ 棺の横転を防ぐため、 棺床との空 棺には両端 しい。 当時

ま

階

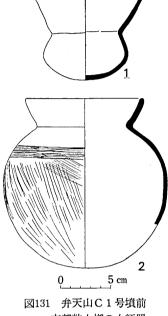
茶臼山古墳 の中枢部では、巨大な大王の陵墓が、彼の権力と富の象徴として、異様なまでの姿をとりつ しかも、こうした変化が三島の首長たちのうえにあらわれてきつつあったとき、 大和や河内

図130 弁天山C1号墳の前方部粘土槨

282

よう。

ŀ



方部粘土槨の土師器

ない。ただ、

河内の允恭陵と形態の類似す

る茶臼山古墳(現継体陵)が、

茨木市高田

にどれほどの影響を与えたかは明らかでは の国際的軍事行動が、この三島の首長たち つあった。

辛卯 (三九一) 年の朝鮮半

島にとって、一つの画期とみることができ

ら、この周濠をそなえた巨墳の築造は、三

台地上に出現したのを五世紀中頃とするな

そこに、突如、巨大な墳丘と、濠をめぐらし堤を築いて、外界と厳しく隔絶する形式が登場した。この形式 形に囲み、部分的に二重濠になっている。また後円部の外方には、濠を距てて、数基の古墳がとりまくよう の墓なのか、それとも主墳の栄光にあやかろうとする小首長の墓なのか。従属的な関係にある人物が、 は三島で生み出されたものではない。巨大な墳丘と濠を距てて配置された諸墳は、 に配置されている。これまで三島の首長墓は濠をもたず、尾根の上に系譜的に配列する形式をとってきた。 り出しがある。この墳丘をとりまく幅三○メートル内外の濠と、さらに南半部は堤を距てて幅狭い濠がコ字 ル、その高さ一九・二メートル、前方部の幅一四七メートル、その高さ一九・八メートル、くびれ部に造 茶臼山古墳の墳丘は、 西北から東南に主軸をおき、その規模は全長二六六メートル、後円部径一三八メー 内廷を構成する従臣たち 主丘



図132 茶臼山古墳(茨木市)

高いので、

被葬者の頭は東にあったと推定されている。

П

が、その小字を「吉志部山」というのは、 そのことと関係があるのだろうか。この主墳を茶臼山と呼ぶのは、 本拠はどこにあるのだろう。三島の西部では、 をとりまく滾の中に埋葬される例は、紅茸山や狐塚古墳群にもみられる。この一群の古墳群の被葬者たちの いかにも歴史的な縁由があるようにみえる〔三浦圭一「吉士につい」 初期の王墓がつくられたあと、その系累を示す墓は影が薄い。 前方後円の形態をさしての呼称であろう

あり、 ず、 **壙を東西に掘り、壙底中央に断面U字形の溝を掘って、そこに割竹形木棺をすえてあった。木棺は長さ三・** 七メート め 墓谷古墳群 地山を削り整えて墳丘としたと考えられている。内部主体は、長さ約四メートル、幅約一メートルの土 中央部や西寄りに鉄剣各一をそえ、西端近くに鉄製鉇一との間に滑石製小玉があった。棺底は東側: まはない。 幅約五〇センチメートルと推定した。棺の東端に近く、鉄製の斧・鎌・ノミ・鉇・刀子などが ろに、東へのびる尾根があり、その基部に一基の円墳があった。すでにゴルフ場になったた 弁天山古墳群のある丘は北へのびている。C1号墳から北へ約三○○メートルを距てたとこ 直径約三〇メートル、高さ約五メートルの規模をもつこの古墳は、本来ほとんど盛土をせ

下段の上縁との間に幅約一・五メートル 後方部背後の丘陵を削ることをかなり省略している。 段に築成されたとすれば、 利用してつくった古墳で、 この古墳のすぐ西北に一基の前方後方墳があった。この古墳もすでにない。南北方向に走る丘の脊梁部 北側に後方部、 後方部は基底の一辺が約三一メートルの正方形を呈するとみられるが、実際には の平坦部がめぐる。 南側に前方部がある。 後方部中段の下辺は一辺約二二メートル この平坦部より、 全長約四○メートルのこの古墳は、 前方部側を除く三面は、それ の正方形で、 し

部中段下縁の延長線上に、前方部下段下縁があって、墳丘築成に際して、平面形の正確な設計がおこなわれ ぞれ一つの斜面となって、 下段の基底部の長さは約一二メートル、幅は約二四メートル(推定) となる。後方部をめぐる幅約一・五メー 形をなした平坦面である。この下方の上段斜面の基底部は長さ約一〇メートル、幅約一四・四メートル、最 前方部の頂は、 ル の平坦面は、前方部にもつづいている。局部的に残っている葺石面の基石列をみると、平面的には後方 後方頂部より約一・三メートル低く、その上面は長さ約一○メートル、幅約七メートルの方 後方部の頂部に達する。墳頂部は約一○メートル四方の正方形の平坦面である。

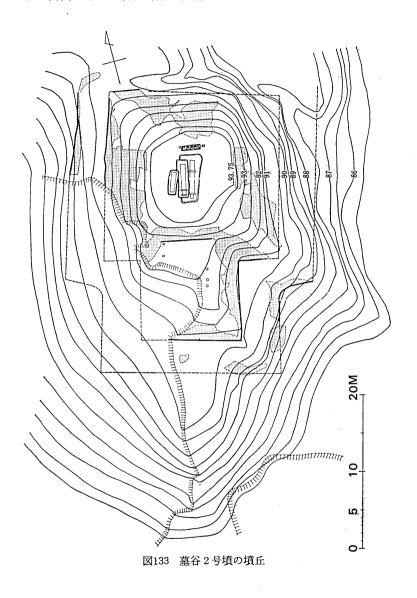
その長軸は墳丘の長軸に平行していた。 後方頂部には三基の木棺(a・b・cと呼ぶ)が、それぞれ設けた土壙内に直葬されていたが、 いずれも

たことを推定し得る。また、葺石面には、作業区分を示唆する界線が認められる。

外側の凹みは、それぞれ小さい空間となり、副葬品を納めた。 棺は後の埋葬を予定したか、やや東に片寄っている。棺端には厚板をはめてあったらしい。この両小口板の さ約一五センチメートルを掘りさげ、そこに長さ約二・八メートルの組合式木棺(a)を納めた。その際 ル、深さ約四○センチメートルの墓壙を掘り、壙底には、長さ約五メートル、幅約八○センチメートル、深 三次の埋葬は次のように復原できよう。まず、後方頂部中央に、長さ約六メートル、幅約 二・八 メ ー 棺内には鉄刀子一のみであった。

トルの墓壙内に、長さ約三・七メートル、 ○センチメートルの板をあて、その南を副室とした。棺底中央に針状鉄製品と滑石製小玉があった。 つぎに、さきの棺にそわせるように、その西側に墓壙を掘った。長さ約四・八メートル、 幅五〇~六〇センチメートルの棺 <u>Б</u> を納め、 幅約一・五 南端には厚さ約

■ 考古学からみた原始・古代の高槻



掘り、 さらに、 その中に、長さ二・六メートル、 b の西にそって、 長さ約三・三メート 幅五〇~六〇センチメート ル 幅約一メート ル、 ルの割竹形木棺(c)を納めた。 深さ約二五センチメー トルの墓壙 棺内北

側に針状鉄製品があり、棺外側には鉄鏃があった。

側に溝を掘って、新たに円筒埴輪をならべた。また、須恵器・土師器もみられる。 第一次の埋葬時に、後円部や前方部に埴輪(家・甲・鳥など) がおかれたが、 その後の埋葬時には、 棺の北

墳頂部には円筒埴輪等があったらしい。 側が破壊されているので、 石で蔽ってある。墳頂部には、ほぼ東西に長軸をおく組合式箱形木棺二基が、北と南にあった。 前方後方墳の北約一〇〇メートルに、直径約三〇メートル、高さ約五メートルの円墳があっ 全長は明らかでない。 南の棺内からは鉄剣一、北の棺では遺物を認めなかった。 た いずれも東 斜 面 は葺

していたが、 しく崩れ、部分的に葺石や埴輪(家・盾・蓋・鳥・円筒)の配列が遺存した。主体部は破壊されていたが、 した木棺の痕跡とみられる赤色顔料が長方形の範囲で認められた。遺物はほとんど破壊され、 ル、その高さ約四メート ま述べた円墳の北に、 ガラス玉や鉄製の刀・鏃・胄・ ル 南向きの前方後円墳一基があった。 前方部の幅約一五メートル、その高さ約三メートルを測る。東側や墳頂部が 甲・ 馬具・ノミ・斧などがある。 全長約四五メートル、 後円部径約三〇メート 原位置を遊離 直葬

年代はほぼ五世紀中頃、 葬者は、 以上四基の古墳については、 この東方にある服部宮之川原の首長たちであろう。 前方後円墳の年代は六世紀前半と推定されている 〔山古墳群の調査』〕。 この 古墳 の被 前方後方墳を最も古く、 前方後円墳を最も新しく推定できる。 服部は芥川東岸の盆地状のところであるが 前方後方墳の 服

て、

時代後期の塚脇古墳群の出現の時期をもって、それにあてる方が適切であろう。服部に人が住み、この一ま 部の地名に仮託して、渡来人の居住地のように解されている。けれどもそれは、この地域の北方にある古墳 れとよく照応し、 掘ったとき、 宮之川原のムラのあとは、詳細にわかっているわけではない。付近に住宅がつくられた折に排水路用の溝を を与えられそうな古墳があるというから、早くからこの土地を耕地化する動きはあったのだろう。 の通っているあたりには、弥生時代後期の遺跡がある。また、この地域の東の安岡寺や浦堂には、古い年代 とまりの土地を耕しはじめたのは、弥生時代に遡るかもしれない。南の真上に近く、 土師器や須恵器などがみつかったにすぎない。しかし、土器の年代は、西の墓ケ谷古墳群のそ 地形的にも西を望める位置にある。古墳群とムラが一組となるよい例である。 ちょうど名神高速道路 ところで

「輪の窯 跡 高槻の西に「土室」というところがある。この地域を「ハムロ」と呼ぶのには、

ニが粘土のことだということはわかる。土室の村の北にある谷は、古墳時代の埴輪をつくったところであっ る。土を「ハニ」といったのは、遠い昔のことであるが、埴輪や埴生の宿の埴といえば、

わけが

あ

た。 冬十一月に、新羅、使を遣して獻り、并て調賦を貢る。使人、悉に國家の、新羅が任那を滅すに憤りたまふを知まれている。 しんぎ うな まじ ものに きば かいぎの たせち つかか もつく まだじ 八世紀につくられた日本書紀の、欽明天皇二十三年冬十一月の条に、

廬の新羅人の先祖なり。 敢へて罷らむと請さず。 刑戮に致らむことを恐りて、本土に歸らず。例、百姓に同じ。今の攝津国の三嶋郡の埴っみ、メピ ペーター ターター ターター ターター タータード ターター ドースースースールーター サヒー

あろう。土室という地名は、この埴廬と関係があるのだろう。でも、その人たちが住みつくよりもっと前 という記事がある。そして、 この記事に「今」とあるのは、 淀川北岸を三島郡と呼んでいたころをいうので

ら、この近くの谷間で埴輪をつくっていた人たちがいたことがわかっている。

六二。〕。そして、その状況や地形からみて、埴輪を焼いた窯が「登り窯」の構造で、学研究』。 け加えている。たいてい、 たろうといっている。 の断面をみせ、その中に円筒埴輪一本が埋めこまれた状態であったことを報告している [土室の埴輪窯址 篤氏は、 つらなっている。新池の水がひくと、東の岸に埴輪の破片や灰の層があらわれる。 新池のある谷は、 近くの崖に、直径約六五センチメートルの円筒形の焼土層が、約四五度の傾斜で、 幅約一〇〇メートルの狭い谷であるが、中ノ池・上ノ池といくつもの池が段々になって しかも、 埴輪の窯はいくつも並んでいるから、この谷の斜面を利用した窯は、新池以外の | 灰原の裾に石で築いた壇があって、窯の構造物かもしれないということもつ このあたりを調べた免山 トンネル式のものだっ 池にむかってそ

の起源を説くことになる。 呼ばれる墓では、溝のなかにお供えの土器が埋まっている。そこで、これらの土器と埴輪を結びつけて埴輪 を副えたり、 にしている。つくり方だけではない。埴輪のつかい方も土器と関係がある。 粘土紐を捲きあげてつくる方法は、土器のつくり方と似ている。だから、 埴輪は日常につかう什器と違って、古墳のうえにたてならべるように、特殊な役割をもった器物である。 埴輪というのは、 墓のまわりに土器を供えたりした。 なるほど、 葬礼のためにつくられた古墳時代の素焼の土製品である。 大筋はそうかもしれない。 土器には供物をいれたものもあっただろう。 しかし、 弥生時代の墓にあるのは埴輪とは 埴輪の製法は、 弥生時代の墓には、 土器の製法を母胎 方形周溝墓 死者に土器

埴

「輪の起原について、

かつて近藤義郎・春成秀爾の両氏は、

吉備地方の弥生時代後期の特殊壷形

器台形

ところにも及んでいるかもしれない。

じた。 の の埴輪があることが知られるにいたって、 埴輪に、 あるのに対し、 がつくりだされたと推論したのである。このような推論の傍には、 畿内諸勢力が吉備地方にはじまった円筒埴輪と壷形土器の葬祭形式を受け入れ、盛行させる際に、 問題が横たわっている。 た。しかし、その後、奈良県の箸墓と称する古墳の埴輪に、両氏があげられた岡山県都月一号古墳と同様 形象埴輪のうち、早くあらわれる家形埴輪の先駆形態としては、 円筒埴輪や壷形埴輪の発生が吉備地方にあると認めるにしても、その他の埴輪について、なお未解決 吉備地方にみるような「特殊」な壷や器台との連関を示すものがみられないことなどが考慮され 象徴的形象化として埴輪があらわれることを指摘した [起源」『考古学研究』 三十三〕 この論旨は、 吉備地方では「特殊」と呼び得るような壷や器台の発達がみられること、 一概に吉備地方をもって、 女男岩遺跡の 図134 台付家形土器 なら、 しか 大鼻の台付家形壷などをあげることができよう。 台付家形 土器 (高さ約五○センチメートル) や鳥取県 のについて、墳丘表飾の問題を考えなければなら 奉献される器物を土にうつしたものであると解す 前期古墳の墳丘上に埴輪の認められないも 弥生時代後期末とされる岡山県女男岩の 他面では、 畿内の弥生時代後期の壷や器台が矮小で 埴輪の発生地とする説を疑う論さえ生 埴輪の発生が、本来墳丘上に 畿内の前期古墳の **量形埴輪**

土器から壷形埴輪の成立を説き、

その成立の背景に弥生時代の飲食物供献の祭祀から、

首長葬送の祭祀へ転

ないであろう。

胴部には三角形や円形の透孔や細く突出した凸帯がめぐっている。他にも一種の直弧文をもって飾り、奈良 埴輪がその長軸を配列方向にそろえて据えてあった。この埴輪は直立した平板な台形に近い立面形をなし、 トルの緩斜面には、両側にそれぞれ一列に並べられた埴輪列があり、そのうちには、長大な楕円形の特異な 例えば、弁天山C1号墳の埴輪をみると、後円部前面に特別な考慮をはらってつくられた幅約七・八メー

この埴輪はいかなる機能をもっているのだろうか。 靱形埴輪などの背後にみられるような単なる支柱の部分とは同一にあつかえないものである。だとすると、 みると、それ自体が装飾的機能を帯びた器物かもしれない。だから、 このような長大な楕円形埴輪の破片は、他の個所からもみつかっている。文様がつけられているところを 同じ長楕円形の埴輪でも、 盾形埴輪や

県宮山古墳や京都府庵寺山古墳の靱形埴輪の文様と関連するものがある。

くなど、いわゆる器台としての特徴をそなえている。 わずかに外反する。あるものでは、最上段の凸帯より上部が立ちあがり、その凸帯より下方に大きくひら この長楕円形の埴輪は、それ自体で完結するものであり、脚部がひらいて安定するようにつくられ、上端

推測を延長すれば、 ちには、 たと推定できる。 つまり、 奉献の仮器として土にうつされ、器物と台とが接合してつくられるようになったと推測する。 この埴輪自身が器財埴輪なのではなくて、これを台として、この上に器物を載せたり、 盾形や靱形の埴輪の最初は、こうした台に現物をたてかけたものであったろう。 埴輪の認められない初期の古墳では、奉献する器物をそのまま墳丘上に配列してあった たてかけ

■ 考古学からみた原始・古代の高槻

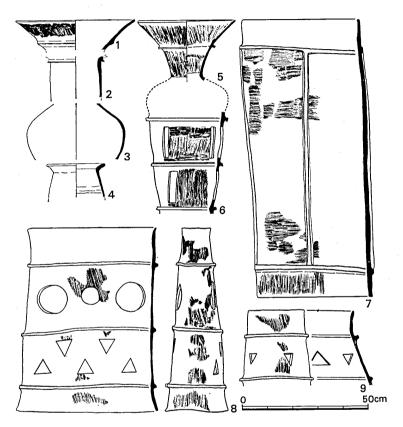


図135 弁天山古墳群の埴輪(1~3 A 1号墳,5~7 C 1号墳)

可能性が考えられる。

三は横方向なのに、一のみは縦方向である。この形態のよってくるところを求めるなら、特殊器台の類に求 埴輪が二個たててあった。下方の一個を復原したところ、上と下にそれぞれ一条の凸帯がめぐり、それらを 定型化している。 め得るであろう。しかも、この古墳では、すでに壷形埴輪は、壷と台との結合した形態をもち、 つなぐ縦の凸帯が円筒を四分する位置につけてあった。横帯間の刷毛目のつけ方も特異であって、四分中の また、弁天山C1号墳のさきの斜面では、左右の埴輪列にはさまれた斜面の中央(主軸上)に、特大の円筒 円筒埴輪

のであろう。 をそなえているところをみると、土器の製作と埴輪の製作が、同一の作り手によってなされたことにもよる は、 財埴輪がつくられるようになったらしい。古墳に奉献される器物のうちで、壼がはやく台と一体 化 あらわしている。B1号墳に埴輪のないところをみると、壷と台を結合して一体化した壷形埴輪の創出は、 A1号墳とB1号墳の間の時期であったと推定できよう。そして、やや遅れて、他の器物を土にうつした器 C1号墳以前の段階は、A1号墳でみるように、壷と台との結合した形態をもちながら、壷の体部全形を **壺自体が土製品であったことがその最大の理由であったろうが、壷形埴輪がよく実用の壺の形態的特徴** したの

の窯が見出せないのは、土師器の窯が見出せないのと同じ現象であって、埴輪もまたムラの自給的土器生産 つくられたとみてよいであろう。一つのムラの後背丘陵に、「、二基の首長墓をつくった段階までは、 もし、この推測が正しいなら、前期の古墳の埴輪は、土師器の製作者たちによって、同様の技法をもって 及するであろう。

字形に近い〔遺跡発掘調査概要』〕 て窯体を築いたもので、厚さ三・五センチメートルの側壁から一連のベースをもち、 に七枚以上の床面があり、約一〇度前後傾斜し、燃焼部と考えられる部分は、傾斜が緩やかで、 〇センチメートル近くまで幅が狭くなり、その部分に煙道をとりつけたと推定されている。 存し、その規模を知ることができる。窯は長さ六・七五メートル、幅一・五六メートル、奥壁の部分で約四 めたベースが何枚かあるらしい。東斜面では、 査された。窯は北へのびた低い丘陵の西斜面と東斜面につくられている。 先年、著名な古市古墳群の中央に位置する羽曳野市の誉田白鳥遺跡で、 九基の窯が調査されたが、そのうち、 西斜面にある一基は、 五世紀と推定される埴 東端の一号窯はほぼ完 内部に埴輪片を敷きつ 二号窯は焼成部 横断面 地山を穿っ 「輪の窯が が 調 U

の中でつくられていたからかもしれない。

埴輪の製作は、須恵器の出現と何等かの関連をもつのであろう。そう推測するなら、 を埴輪の生産にとりいれるようになったのではなかろうか。このことは、 られた結果であって、 な埴輪に、 するのはやや早計であるかもしれないが、さきに述べた土師器の製作との関連を想起するなら、 な埴輪を要する巨大な大王墓がつくられるようになると、短時日で量産する必要から、 こうした窖窯の形は、 いくつか異なった手法の埴輪がみられるのは、首長傘下の複数のムラでつくられた埴輪がもち寄 埴輪の生産はなお土師器の生産を基礎にしていたといえよう。しかし、 須恵器の窯とよく似ているから、 四世紀の埴輪の焼成装置が不分明な現段階で推測 ひいては埴輪製作者の問題にも波 前期の古墳にみる大量 須恵器の窖窯の手法 その後、 窖窯による 大量

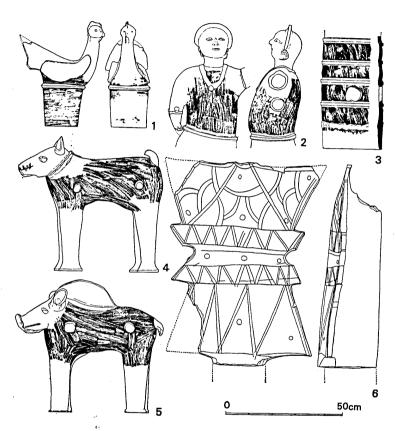


図136 狐塚古墳群(1)・昼神車塚古墳(2~5)・新池窯跡(6) の埴輪(1鶏,2ミコ,3円筒,4大,5猪,6盾)

酷な労働は、 土を掘り、 量な埴輪をつくるには、そのための集団的労働が組織化されなければならなかった。大量な燃料を集め、 充足するという枠があったから、製作の技法も、生産の体制も、そういう要求を充足する方向で動いた。 製作の動機が、特定の人物の死という哀しむべき動機に発していて、生産の基本には、 定型化した埴輪は群としてつかわれる器物であるから、 つぎつぎに同似の製品をつくる作業は土器の生産とは異質であったとみるべきであろう。 女性のみの労働ではなかった。むしろ、埴輪は男性の労働を前提としてつくられる器物であっ 一時に大量につくる必要があった。 所定の時日や数量 しか この苛 大

たとみるべきであろう。

ることが、いつからこの三島でおこなわれるようになったかということは、今後の課題であろう。 頃のものである。そこから、この窯の成立の年代も同じころであろうという推定が生ずる。しかし、 にこたえて一時的量産をはかり得ないであろう。そこから、 ある谷は、詳しく調査したわけではないから、その成立の年代は、なお謎である。窯を構築して埴輪をつく 埴輪の製作が、さきに述べたようなものであるとすると、 話をもとに戻そう。 新池の窯はよくわからないけれど、これまで見つかった埴輪はいずれも六世紀 数基の窯でつくる小規模な生産形態では、 一種の専門化を招くことになる。 新池の

Ж 西のムラ

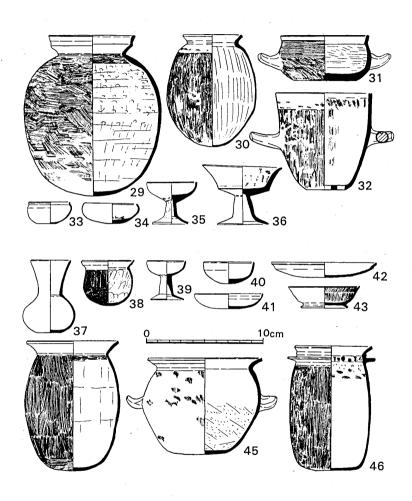
な放射状の骨組が床面に炭化して残っていた [跡発掘調査概要Ⅱ』 〕 この住居のすぐ隣には 須恵器・土師器が たあと火事になったらしい。ほとんど遺物はなかったけれど、上屋の構造を察知させるよう

せまい発掘坑ではあったけれど、三基の竪穴住居が、川西遺跡でみつかった。

一基は引越し

混在し、 二種類の土器を共用していたと推定された。 その須恵器は、土質からみて、あきらかに大阪南部の

I



上牧遺跡, 26~28 安満遺跡, 37 安満山古墳群, 38~40 塚原古墳群)

■ 考古学からみた原始・古代の高槻

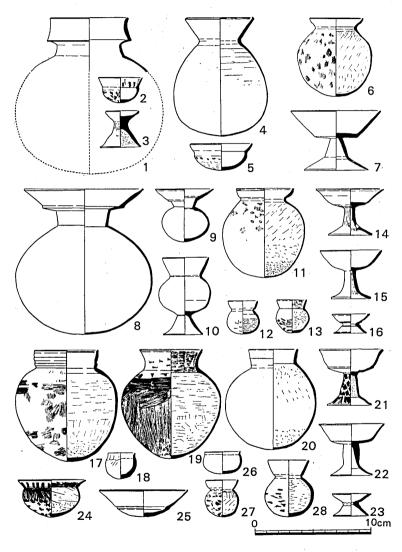


図137 土師器(1~7・17・19~25・29~36・41・46郡家川西遺跡, 8~16

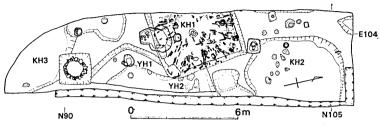


図138 郡家川西遺跡の竪穴住居

との間に緊密な関係が成立していたことを知る。 矛盾するものではない。 集団の管掌者であった豪族の手を経て全国各地へ供給された」ということと が指摘されたように、「陶邑窯の製品は中央権力の手を経て、 あるいは 陶工 応したこのムラの特異性をみると共に、 ラにあらわれ、 式に属するものであった。ここでは、 陶邑の窯でつくられたと推定し得るもので、 住居があったわけで、須恵器という新来の土器が、 一般化しているところをみると、そこに、新文物に敏感に対 須恵器の流入の時期を前後にはさん **陶邑の窯業集団を統轄する政治勢力** 須恵器の型式としては最古の型 それはかつて、 いちはやくこの川西の 田辺昭三氏

だし、 供膳用器として、すぐれた機能を有していたから、 あったことによるのであろう〔『千里古窯跡群』〕。豊中市に有力な勢力のあった ٤ ことは、 にあたる。 た。この地の有力首長によって導入されたのであろう。そこは千里丘陵の西 陶邑ではじまった窯業生産は、その後まもなく豊中市桜井谷でもはじま 燃料が手軽に入手できること、そのほか水の便や需要者の問題も有利 海成粘土は高温に耐えられないから不適であるといわれる)が 近在に ある こ 豊中市桜塚古墳群のあったことからわかる。 ここに窯がつくられた理由は、 須恵器をつくるに適当な粘土(た はじめから交易品として この焼物は貯蔵用器

■ 考古学からみた原始・古代の高槻

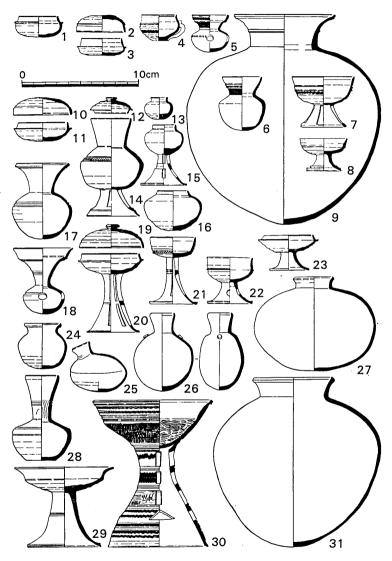


図139 須恵器 (1~4·7~11·31 郡家川西遺跡,5 宮山遺物散布地,6 紅茸山祭祀遺跡,12~14·16·19~27·29·30 塚原古墳群,15·17·18·28 安満山古墳群)

5cm 3 師楽式土器 図140 3郡家川西遺跡) 西のムラの一角を示している。この地区より北へ約一 〇〇メート る。 三基の竪穴住居は、 ルはなれたところ(一六一H区)では、

は の性格をもってい 豊中市桜井谷に五世紀に成立した須恵器生産は、 原料や燃料の問題もあったと解される。 だから、この生産と供給は、 た。 土師器が旧来の手法を墨守し、 各ムラの物資流通のコースにのりはじめると、 高槻で須恵器の窯がいとなまれるのは、 その後、六世紀になると千里丘陵の東縁に移る。一つに 自家供給的生産を前提としていたのとは 急速に流布したらしい。 ずいぶんのちのこと 異 なって

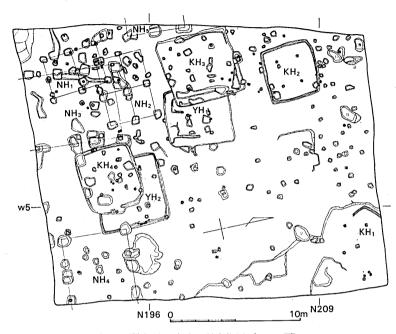
そこには茫大な師楽式土器と炭の推積がみられた。 川西のムラのもう一基の竪穴住居も一辺約五メートルの隅丸方形の竪穴住居と推定されるものであるが、 ほぼ七世紀中頃と推定される。

師楽式土器は高さ一○センチメートル・径五センチメー

ミリメートルの薄い器壁の外面には叩目がついて 交易によって入手されたことを示すものであろう。 ということは、瀬戸内の海浜地帯でつくられた塩が、 海浜地帯に多い。その土器が川西のムラに大量にある トル前後のコップ形をした小型の土器で、厚さ二~三 瀬戸内海沿岸や知多半島・能登半島・若狭などの この土器は土師器の分派にあたる製 塩 用 の 土

いずれも五世紀中頃にあった川

東西



郡家川西遺跡の竪穴住居 (16-H区) 図141

がたつ。 形の各辺は、ほぼ正方位に合致し、周壁 そのうち、 前後と推定される。柱穴は深さ約三〇セ があり、 下に細い溝をめぐらし、その中央には炉 紀頃のもので、 住居がみつかった 居遺構とともに、古墳時代の四基の竪穴 の発掘坑から、 の方形で、周壁下に浅い溝がめぐり、 推定されている。 居の年代は、 くりの似た一基(KH2)がある。こ の 住 ンチメートルである。この住居の北々西 | | | メート 柱は直径約二〇センチメート 約二メー 北側の一基(KH4)は、 五世紀末から六世紀初頭と ルのところにも、 一辺四・四メートルの方 トルの間隔で四本の柱 一辺約四・二メート 【跡発掘調査概要■』 】 方向とつ l 四 ኑ 世 ル 四

遺 物		_
器		_
・把手	馬の歯	
口鉢		
・釜・高杯・	壺	
坩・甕・壺		

るが、

その所属時期は明らかでない。

だが、

土師器の

発掘坑の西南にも、

一辺約五メートルの方形住居があ

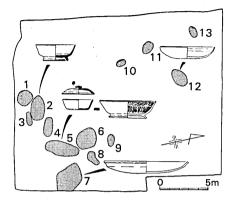


図142 郡家川西遺跡の土壙墓群 (2号墓で馬の歯検出)

る。

どがみつかった。この住居の北約二メートル

を隔

は、須恵器の杯蓋・高杯や土師器の甕のほか砥石片なをつくってあったさきの例とは異なっている。床面に焼土や炭があったから、竈であろう。住居の中央に炉

て、六世紀中頃と推定される方形の住居(KH3)があ

一辺約五・二メートルで、その方向は正方位より

は、すでに弥生時代の芝谷遺跡の住居にもみられた。認められた。個々の住居内に砥石が備えられている例である。床面には、須恵器・土師器・砥石などがい。炭がある。床面には、須恵器・土師器・砥石などがいる。とれている側には、すでに弥生の住居の住屋の住屋にある。とれている側には、すでに弥生時代の主ないがある。とれている場所である。とれている場所である。とれている。とれているのはを、ややずれる。とれているとはいった。

の間隔は約一・六メートルである。竪穴北辺の中央に五センチメートルの柱をたてて上屋を支えていた。柱本の柱は深さ約三〇センチメートルの柱穴に、径約一

■ 考古学からみた原始・古代の高槻

壁と、

表8 郡家川西遺跡土壙墓群遺物

				The state of the s	
	規		模	土 壙	内の
	長辺	短辺	深さ	須 恵 器	土 師
D_1	1.6	1.5	0.35	蓋杯・高杯脚・甕	杯・高杯・甕・釜
D_2	2.2	1.5	0.4	杯蓋・蓋・壺・高台付杯	杯・高杯・甕・鉢
D_3	1.4	0.6	0.4	杯・甕	甕
D_4	2.1	1.0	0.5	杯蓋・甕・平底壺	杯・高杯・甕・片
D_{5}	3.5	1.5	0.6	蓋杯・高台付杯・甕・壺・皿	杯・高台付杯・甕
D_6	2.5	2.0	0.3	杯・高台付杯・甕・壺	鉢・甕・杯
D_7	3.0	2.0	0.3	杯身・皿・椀・甕・壺	杯身・高杯・釜・
$\begin{array}{c} D_8 \\ \downarrow \\ D_{12} \end{array}$	規	模	小	遺物少数 (D ₁₂ に馬の歯)	

川西のムラの東辺、芥川の河原に近いところ(一八一っていた。

は一見して、支配層を区別できるたたずまいがひろが

在したものであった。当時のムラにはいると、そこに

四本柱の上に方形の草葺き屋根をのせた家が群

無片や、四本の柱のたて方などからみて、六世紀頃の 生居であろうか。四基の住居はいずれも、四本の柱で たるろう。住居の北辺に竈をつくりつける形態は、池 田市宮之前遺跡の六世紀の方形竪穴住居でもみられた から、六世紀には普遍的な形態であった。しかし、一 から、六世紀には普遍的な形態であった。しかし、一 方では、今城塚古墳の家形埴輪にみるような、切妻造 方では、今城塚古墳の家形埴輪にみるような、切妻造 方では、今城塚古墳の家形埴輪にみるような、切妻造 方では、今城塚古墳の家形埴輪の方形竪穴住居でもみられた から、六世紀には普遍的な形態であった。当時のムラ ような倉庫かと推定される建物もあった。当時のムラ ような倉庫かと推定される建物もあった。当時のムラ ような倉庫かと推定される建物もあった。当時のムラ ような倉庫かと推定される建物もあった。当時のムラ ような倉庫かと推定される建物もあった。当時のムラ

E区)には、

度の大きさで、遺物をみても、 表八にみるとおりである。 まつる慣行が、 先駆をなすものであろう。 を収容したものが見つかっている。 や焼土が含まれており、 須恵器が埋土中に含まれていたから、 **→**/∠原 4 このムラにもあったのかもしれない【古代史発掘】一〇 】。 番山 土保山 **劉** なかに馬の歯を伴ったものが二基ある。 石塚 水野正好氏が説かれるように、 土壙の規模は大小さまざまであるが、 三子山 全く等質的な墓である。 石山 これらは、奈良時代から平安時代にかけて、 茶臼山 茶臼山古墳とその周辺 図143 舟底状の壙は、 は が、 茨木市郡遺跡では、 て存在しない。 している。 二基の古墳は丘上につくられた古墳である 墳、二子山古墳と配列している。 古墳さらに番山古墳、 の 首 その詳細は明らかでない。 西向きの帆立貝式古墳で周濠をめぐら 系 小規模な前方部はすでに削られ 列 その規模は、 は、 さて茶臼山古墳 闘鶏山古墳から西之原っぱ 石塚古墳、 外周の濠も含

の

北 方 K

番

山古墳

はじめの 土保山古

一基の竪穴住居のほか、 一○数基の土壙墓が群がっていた ほぼその年代にあたる墓である。 土壙の埋土はほぼ四層に分ち得るが、どの層にも灰 漢土の神のたたりをおそれて、牛馬を殺して神を その規模・関係遺物を表示すると、 【妳発掘調査概要■』 】 さかんにつくられた土馬 人体一、二体を収容する程 土壙内に一頭の馬の首 七世紀中頃の

の内部主体は、

現在府立茨木高校にある長持型石棺で、その型式からほぼ五世紀末の年代を推定できる。

異なる二つの首長系譜によってつくられた同期の古墳であろう。

おそらく、この二つの古墳は、

同じ計画に基き、

前塚古墳

今城塚古墳の北にある前塚古墳と全く同じである。

ルを距てて、

石塚古墳の獣帯鏡 図144

ている。また、同じ文様で、銘文 や奈良市大安寺の古墳から出土し みられる鏡が、豊中市桜塚古墳群 するにすぎない。この鏡と同范と そのうちの四霊三瑞鏡一面 がある。明治三十年代に墳丘を削 距てたところに、 が現在ボストン美術館にある。 と径の異なる (二四・〇センチメー 鉄刀が見つかったという。 って濠を埋め水田化した際、 一・五センチメートル)のみが 遺存 ル) 伝仁徳陵発見と称される 番山古墳の南、 一枚の広い水田 名神高速道路 (径二

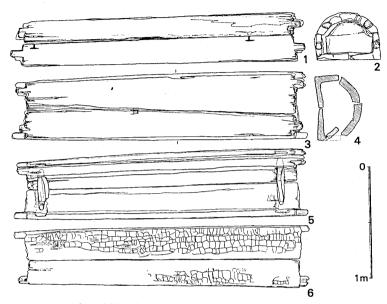


図145 土保山古墳の木棺 (2号棺) (1・2側面,3蓋上面,4断面,5身 上面,6身底面)

研究』2】。 の段階のそれとは異なっているようにみら 治的統合の方式は、後に出現する継体天皇 ていることがわかる。そしてこの段階の政 与にみられるような旧い結合形 式 を 踏 襲 五王の政治的統合の方式がなお同范鏡の分 的関心が九州中部に及ぼされつつあった側 出されることから、五世紀代の倭王の政治 江田船山古墳をはじめ、 係を示すだけではない。 面をうかがうことができるとともに、倭の 百済王や倭の諸王と中国王朝との密接な関 百済武寧王陵から出土した。そのことは、 たことは認めてよいであろう [五王の時代] 鏡が倭の五王の時代に中国からもたらされ 徳陵発見の所伝は疑問としても、 それがこの北摂の一首長にも及ぼされ 同様の図文をもつ鏡が、 九州中部に多く見 同式鏡が熊本県の この 近年、 種

ものである。

でつくったもので、

れる。

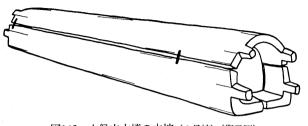


図146 土保山古墳の木棺(2号棺) (復元図)

が異なるだけで、その形制は同じである。

コウヤマキの丸太を縦に四分して、

その一本から断面L字形の長い部材をつくる。それは側板と底板半分とを一木

同様な部材二つを向き合わせて身とし、

側板の両端に近く

溝を彫ってそれぞれ小口板をはめて棺身とし、これに断面弧形の蓋をかぶせた

側板の両端には各一個ずつの突起がつくってある。二号棺では蓋

半は河原石を小口積みにし、七枚の天井石を架したものである。木棺は大きさ

目は横に用いて、あたかも横穴式石室の壁面構築法と共通している。

壁面の上

高速道路の路線敷にとりこまれたため消滅した。その際調査したところによると、 この石塚古墳とならぶように、西に接してつくられた土保山古墳も周濠をめぐらす古墳であったが、名神 った。石室は竪穴式とはいえ、壁面最下段は板石を縦に使用し、その上の二段 の東隣に、長さ約三メートルの組合式木棺(二号)が粘土で被覆して並置してあ 長さ約六メートル、幅九○~六五センチメートル、深さ八○~九○センチメー ルの竪穴式石室内に、長さ約三・八メートルの組合式木棺(一号)があり、 長軸をほぼ南北におい

た

その頭辺に小型の乳文鏡一、 と身を鎹でとめてあった。一号棺には、頭部を北辺においた一体の被葬者と、 漆膜のみが残った把頭一があった。それにはわが国固有の文様である直弧文が ガラス小玉をつらねた頚飾りや櫛などがあり、 黒

認められる。 てある。 棺外西側には黒漆塗りの二枚の盾や三本の鉄鉾がおいてあった。 また棺内足辺に短甲一がそえてあった。 棺外東辺にも短甲一をおき、 盾は綾杉文や鋸歯文で飾られ、 棺外足辺には馬具をお

の柄には連続した格子文をつけてあったらしい。

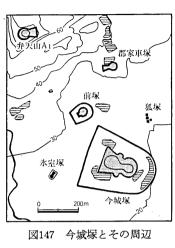
武装した首長の姿がある。この傾向はその後六世紀にも継続し、そこでは新たな大陸風の技術が加わる。 武器・武具を副葬する風潮は、 角付冑一、小札綴の草摺・肩甲各二、鎌などが納めてあった。弓はいずれも長さ約二メートル、径約二・五 塗ったものもある。 センチメートルで、 一号棺は武具を納めたものであって、死者を納めたものではない。 こうした副葬品の品目をみると、武器・武具の数が多いことに気づく。 一は黒漆塗りのままで、他は黒漆塗りで樺巻きがあり、 五世紀になってとみに顕著になったもので、そこには支配層の鉄の掌握と、 内部には、 なかには樺巻きのところを赤く 矢をいれた靱四、弓六、 首長墓の中に、 衝

がある。 だ、その祭儀がどのようなものであったかは知る由もない。二子山古墳の近傍には、茨木市域内に石山古墳 速道路にかかるところから、局部的調査がおこなわれたが、くびれ部南側で、長さ約七メートル、 的形態は、 にある造り出しは、 土保山古墳の西にある二子山古墳は、 の造り出しのあることや、幅一〇メートルの濠の外堤に円筒埴輪がならぶことがわかった。 弁天山B1号墳やC1号墳のくびれ部近くにある壇状のものからたどれるのかもし れ **祭壇であろうといわれているもので、応神陵や仁徳陵にもみられる。おそらくその先駆** 全長約四○メートルの小形の前方後円墳である。 その周濠が名神高 ない。 くびれ部 幅約三メ

墳

師器・ 方後円墳の可能性も考慮している〔焙」 茨木市文化財資料集9〕 ここで 注意すべきは、先述の一連の 諸古墳 と細 当った免山篤氏は、 いらべきであろう。 ことである。 い水路を距てて位置するこの古墳が、 その間を流れる細流にあり、 須恵器の破片が見つかった。すでに破壊された後だったため、その詳細は明らかではないが、 もし、そうだとすれば、台地上の茶臼山古墳を含む一群と、土室に群在する一群とを界する境界 五世紀後半に属する直径約三○メートルの円墳を推定した。 性格の異なる両古墳群の営造集団の領界意識がうかがえる興味ある事象と 一群として包括されず、むしろ茶臼山古墳に関連すると解されている しかし一方で、 西向 きの 調査に 前

の 郡家車塚 周 辺 古 前塚 は 土室の一群と対比できるのは、 Ô 狐塚 ĺ. さきにふれた。その東北の丘麓にある車塚古墳は、 今城塚 200m 今城塚古墳の周辺にある古墳群である。 ため、 方後円墳であって、 に営まれた周濠のない古墳である。 でない。丘陵と墳丘を堤でつなぎ、その間を溜池としている ところから、 一見周濠をもつようにみえるけれども、 郡家の地名を冠して呼ばれている。 埴輪が認められるが、その内容は明らか 同名の古墳が天神山のふもとにある 前塚古墳 本来は、 西向きの に つ い 斜 前 て 面



るように、 していた。 前塚古墳が、 そのため今城塚古墳の陪塚と解されたこともあ 氷室塚古墳もまた、その対する外域延長上に位置 あたかも今城塚古墳の外域延長線上に位置

調査の要がある。

ようやくそれらの実態が明らかになりつつある。掛塚については不明であるが、神輿塚と称する小隆起は、 狐塚」・「神興塚」などの塚名を小字にとどめたり、それらしき地貌・地物を残すところがあるが、近年 消滅したこの前方後円墳も、前塚古墳と同様、今 城 塚 古 墳 に 先行する年代のものであったろう。 周濠も北向きの姿も消えて、住宅地に化してしまった。このほか、今城塚古墳の周辺には「掛塚」

一枚の凝灰岩の板石が立つのみで、古墳ではない。ただ、この板石がどのような性格のものであるか、今後

った。そこで、以後、この遺跡名を「狐塚古墳群」と称することに改めた〔古墳群発掘調査概要』〕。 は広範囲にわたって五世紀以降の土壙墓群が群在し、その東縁には方墳四基がならぶことが知られるにい に盛土した小丘ではあるが、何等古墳とすべきものではないことが明らかになった。ところが、この一帯に 東西約八五メートル、 狐塚と称する小隆起は、今城塚の東辺にあって、もと家畜小屋の一角をなしていた。 南北約一○○メートルの地域を二次にわけて調査した結果は以下のとおりである。 調査の結果、 水田

周溝墓にはじまる造作を継承している。だが列状に配列するところは、弥生時代のそれと共通し、 地域の東南部に、大は一辺約一七メートル、小は一辺約八メートルの方墳がある。大きいのは主軸を西へず の須恵器・土師器を副葬してあった。それより推して、この方墳群の年代の一点を知ることができる。 者の墓であることをみせている。 らしながら北へならび、 中央の最大のものには、 小墳は南の一墳の東側に位置する。 内部には小土壙数基を認めるが、それも大小あって、家族墓の 色 彩 周濠内に五基の土壙が一列につくられ、そのうちの一つには、 いずれも周濠は重複せず、弥生時代後期の方形 五世紀末 同一血 が

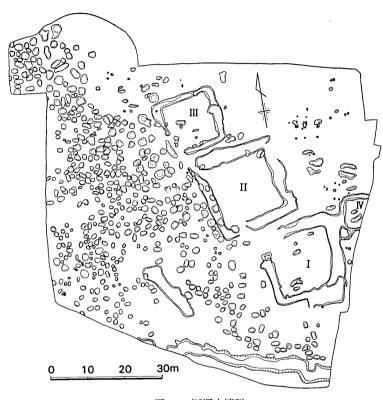
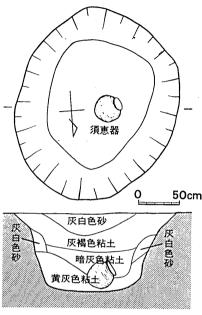


図148 狐塚古墳群

西に群在する六〇〇基以上

の土壙墓群は、そのほとん

どが副葬品を伴わず、個別 楕円・長楕円・正方・長方の る。 か 加わりさまざまである。ま うものにあっても、 ほぼ一〇対一の割合で、伴 のと伴わないものの比は、 難である。副葬品を伴うも に年代を確定することは困 各形が認められる。平均的 であって、その平面形が円 の甕・釜・堝・壷坏、須恵器の 土壙の形態もまた多様 家・鶏・武人などがあ 埴輪などのほか瓦器も 埴輪には円筒埴輪のほ 土師器



狐塚古墳群の土壙墓 図149

が、

一部のものでは、木板の蓋をしたと推

定されるものがある。その年代は、瓦器を

蔵する一群が、東南部にあり、

西北部の土

壙に大型のものが多い傾向をとりあげるな

目下、それぞれをグループに分ち、被葬者の単位を析出する作業は進行中で、結論を得るにいたっていない。 ながら重複していないところをみると、本来、地表には封土のような標識となる構造物があったのであろう。

分に、長期にわたってつくられている状況は、共同墓地のみならず、村落内部のあり方を知るうえで重要である。 西遺跡の住人であろう。方墳が東方の集落からみて目立つ位置を占め、土壙墓群がその西方の陰にかくれる部 の土壙墓群は、西から東へ緩やかに傾斜する地形に営まれたもので、これらの被葬者は、このすぐ東にある川 ら、さらにその総数は増加するとみてよい。 五世紀末につくられた方墳以後、その西側に累々と形成されたこ いところをみると、この小溝が墓域の南を限るものらしい。墓域はさらに西北部へ拡がることが知られるか これらの土壙墓群の南には、幅約二メートルの浅い溝が東西に走り、これを越えてつくられた土壙墓のな ら、この西北辺のものを古く、東南辺のもの を新しくし得るであろう。いずれも近接し

五メートルであるが、小さいものでは五〇

な大きさは、

幅約一メートル、長さ約

センチメートルである。棺様の施設はない

I

今城塚古墳

今城塚古墳は郡家の西にある巨大な前方後円墳である。

西北に前方部があり、

墳丘の全長約

ない。 りたい。 が、すっかり変ってしまった。だから、徐々に前方部が大きくなったのではなく、人工の造山計画によって ると、傾斜地に立地する古墳の各部の規模を、そのまま平坦地にうつしたため前方部と後円部の つ り あ て、 ちの有力な解釈は、 地山でないといけない。また、玄室まで達する長い廊下(羨道)を一六メートルよりも長くつくったものが 突然変化したものであるというのである。ところが、この前方部という曲者は、さらにおかしな こ とに な 所と葬祭の場所とが立体的な構成として考えられていた。ところが、やがて平坦なところにつくるようにな は垂直で人を寄せつけない。どうしてこんなに変ったのかということに関する解釈はいろいろある。 さら大きくつくられているようにみえる。しかも、今城塚古墳は二重の濠さえめぐらしていて、濠を分つ堤 このすぐ北の丘上にある岡本山古墳と比べると、同じ前方後円墳なのに、その規模が大きく、前方部がこと 1 追葬が可能な横穴式石室が採用されるようになると、遺骸を納める部屋(玄室)を後円部の中心につく 埋葬する場所は高くつくり、その前方には細長く平坦な広場をつくって儀式をやる。つまり、 ル そんなわけで、後円部が縮少しはじめると説明されている〔変遷〕『世界考古学大系』』〕 しかも、大きな石をつかって部屋をつくる以上、その重さを支えるには盛土ではあぶないから固 その高さ約一二メートルである。 九〇メートル、後円部径約一〇〇メートル、その高さ約九メートル、 前方後円墳ははじめは自然の地形を利用して、尾根の頂きや丘の先端につくった。そし 上から見ると前方部がひろがり、 横からみると前方部が高 前方部の幅約一四〇 埋葬の場 そのら

もともと前方後円墳というものが、特別な死者=前首長を納めるところと、それにむかって新首長が儀式

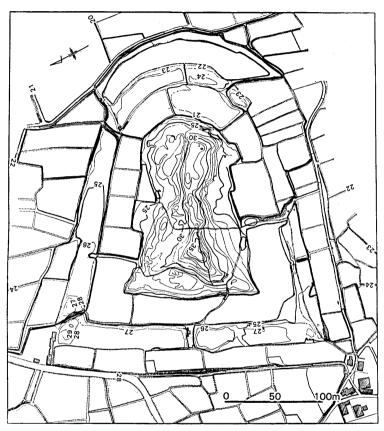


図150 今城塚古墳

部に二つの方壇を 長の経済的政治的 少したもの(帆立 円墳)、 祭式の場 発したと考える があるからであろ 地位と密接な関係 られたりするとい 貝式古墳)がつく である前方部を縮 設けたり (双方中 と、のちに、後円 をやるところと二 したものとして出 つの構成体の結合 二つの構成体が首 った現象は、この

I

この古墳の被葬者を継体天皇とする説がある。

かつて、天坊幸彦氏

(故人) は、

三島地方の条里制の研究

その点で注目すべきである「歩み」『古代史発掘』W」 50 小野山節氏が墳丘の規模・副葬品等を対比して、 古墳時代に数次の規制がおこなわれたとする見解は、

して外域の北側は、 今城塚古墳は、 西北にむくこの古墳の右 それを高い方に設定したと推定される。 北から南へのびた丘陵が、 南側に比べて約五メートル高いから、この古墳をつくるにあたって、前方部を高くする (北)側の内堤、とくにその前方部の隅角部は基盤層が高く残っている。そ 断層によって切断された南側の残丘部を利用してつくられたら

意図から、

埴輪の は か。 あり、 延長部とみられる浅い溝が二本あった。外堤上に埴輪を配列してあった可能性は少ない。 長部に相当するところを調査した。それによると、さきの畠の西側の水路は、 が、その大部分は細い里道になっている。この道の外側にある細い畠は、 ほとんどは水田となっているが、最近、 内濠を埋めて水田をつくる際に破壊されたらしい。また、 墳丘はかなり原状に変更を加えられている。とくに後円部の中央には東南から西北にむけて、 前塚古墳の東にある池が決壊した際に流欠したものであろう。 くびれ部に近く造り出しがある。本来左右にそれぞれあったのであろう。 ほ この掘割より東半分は、西半分より約五メートルも低い、中世に城柵を設けたときの名残りであろう か 種 々の形象埴輪 (家・武人など) がある。 東北部で外濠の一部を検出した。この一帯に外堤が認められないの 内堤の一部も同様に破壊されている。 西南の外堤も部分的に破壊され 外堤の部分であって、 だが左 外堤の外画線に相当し、 (西南) 内堤には大型円筒 側のそれは、 近年その延 外濠もその 深 い掘割 てい る が

じた 〔葉の歴史地理的研究』 所収 〕 この推定は、今城塚古墳を前方後円墳の新しい形態とする 考古学の知見と矛じた 〔天坊幸彦 『今城塚』 『上代浪》。 この推定は、今城塚古墳を前方後円墳の新しい形態とする 考古学の知見と矛 盾しない。さらに最近おこなわれた茨木市太田・茶臼山古墳の周辺部一帯の調査で、濠の外縁に配列した円 简埴輪列の一部が判明した。その埴輪の年代を五世紀後半とする調査結果もその一助となろう。 もとに、「延喜諸陵式」にその所在を島上郡とする 継体天皇三島藍野陵は、今城塚古墳に 該当することを論

には弟国(京都府乙訓郡)にうつり、二十年に磐余の玉穂(奈良県桜井市)に都し、二十五年玉穂宮で没したの。 られ、その後、元年には樟葉宮(大阪府枚方市楠葉)に行き、五年には山背の筒城(京都府綴喜郡)に、十二年られ、その後、元年には樟葉宮(大阪府枚方市楠葉)に行き、五年には山背の筒域(京都府綴喜郡)に、十二年 書紀によれば、父王が近江国高嶋郡三尾の別業に滞在し、三国の坂中井(越前国坂井郡)の振媛を妃としたこ書紀によれば、父王が近江国高嶋郡三尾の別業に滞在し、三国の坂中井(越前国坂井郡)の振媛を妃としたこ あるが、この系図については疑問視する説と容認する説とがある。ともあれ、前代の小泊瀬(武烈)天皇を暴 で、藍野陵に葬ったという。 と、父の死後、母に伴われて越前の高向に帰り、そこで養育されたという。また即位に際して三国より迎え 君として描写し、大鷦鷯(仁徳) 天皇の皇系が、この天皇で断絶することは注意すべきことである。その 後 する異例の書き方である。その欠を補うものとして、五世のそれぞれを掲げる釈日本紀所引の上宮記逸文が 体天皇の墓がつくられたのであろうか。 継体天皇の系譜については、古事記と日本書紀は応神天皇の五世の孫と記すだけで、その間の歴代を省略 さて、この古墳の被葬者を継体天皇とし、その年代を六世紀前半とし得るなら、 書紀が記す八人の妃のうち、四人は近江の三尾・坂田・息長の出身であり、 なぜこの三島の地に、

事記もこれらの首長との結合を示唆している。

古

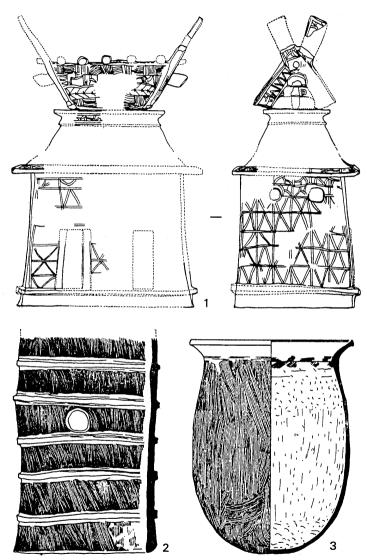


図151 今城塚古墳の埴輪(1・2)と土師器(3)(1家,2円筒)(1) 約1/18.5(2)約 1/10.5,(3) 約1/5

近江の琵琶湖北半の諸勢力との結びつきがらかがえる。しかも、この三島の対岸にあたる楠葉やその東の やり方の先駆的形態は、 ような政治的配慮から、 あるが、それと同時に、 ことにつながる。継体が大和や河内に墓を営まなかったのは、彼が本来畿内中枢部の出身でなかったからで て、その勢力を構成する分子であったと推測する。その場合、三島の占める地理的位置は、 のであろう。三島の首長たちも古くは弥生時代にまでも遡り得るような淀川水系の地域的連帯を 縁 由 の政治勢力のあったことを想定させる。その政治勢力の頂点にあって主導的役割を果したのが継体であった 統が断絶すること、継体天皇が系譜的に応神天皇に結びつけられていることの背後には、仁徳以下 の ――それを「倭の五王」と解するなら ―― とは異なった 首長集団のあったことを 語っているのかもしれな 応神天皇の末裔とされる継体天皇に関する記載が、記紀において部分的に相違があるとはいえ、 以上のことから推測するなら、継体の出現する背景として、淀川から琵琶湖をふくむ畿内北辺に、一つ 桂川沿岸の諸勢力を包括していることを示すのであろう。また、記紀ともに、武烈天皇をもってその皇 あるいは北の乙訓が宮や都の地として記載され、彼の墓が三島につくられたというのは、 かつ、河内・和泉の諸勢力と対峙する意味をもつ。この外交・軍事上の重要性は、三島を重視する すでに完全なまでに「倭の五王」たちが築きあげてあった。その萠芽は前方後円墳 いま述べたような政治的背景を考慮して三島に彼の墓をつくったのであろう。その 本貫地を離れた勢力圏内に、傘下の首長結合のシンボルとして造墓の事業をおこす 瀬戸内への門戸 淀川 そこに や木 とし

自体の属性の中に、

継体の墓が今城塚古墳であるとするなら、その造営に力あった首長として、三島県主を当てることができ

もともと含まれていたことはいうまでもない。

るものがあるのであろう。 よう。安閑紀にみえる、竹村屯倉設置にまつわる三島県主飯粒の説話も、 その基底に造墓の事業と一脈通ず

る。 のまま反映しているようにみえる。その新たな政治的変化の一端を三島では群集墳の出現にみることができ 今城塚古墳のあと、この三島でこのような巨大な古墳はあらわれない。それは継体死後の新たな事態をそ

第三節 律令体制への傾斜

た。 って、数次の埋葬をおこなえる。こうした墓の原型は中国にあり、そこでは塼を積みあげて墓室 をつ くっ の石室をつくり、その南側に羨道と呼ぶ廊下を構築したものである。羨道の入口を積石で閉塞することによ わってきた。 群 その構造は、 集 墳 れる。それは、 今城塚古墳ができた六世紀前半期、 のちに朝鮮半島の高句麗や百済にも伝わり、 堅固な地盤に奥壁となる巨石を据え、それより南方へ側石を組みあげて方形 この三島地方でも、横穴式石室と呼ぶ新来の墓があらわ 東アジアの国際交流のなかで、 わが国にも伝

るにあたって、あらかじめ構想する規模に従って地山の掘さくがおこなわれたことは、いうまでもない。石 である。そのためのコロやテコの利用はもちろん、修羅のようなものも活用されたであろう。 巨石をあつから以上、 一基の横穴式石室をつくるには、石の運搬や石組みに熟達した石工の参 石室を構築す 加 が 必 要

I

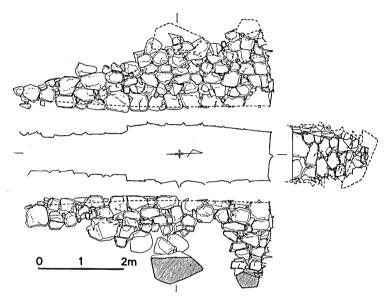


図152 塚原 F 2 号墳の横穴式石室

とは、

であって、

新来の葬墓形式をとり入れた人び

の共同墓地の簡素な土壙に収められていたの

ムラの一般の人びとはなお、

ムラはずれ

ただ、さきにも狐塚の土壙墓群でもみたよう のものが流入したことを物語るのであろう。 ったことは、葬送の観念にも、

大陸・半島風

死者を追葬し得る墓が採用されるようにな

る。 は、 いう条件にかなり制約されるらしい。そのた 八世紀の古事記が記す「黄泉 の 国」 まさに横穴式石室を想定した もので その条件にかなうところでは、次々に造 この種の墓は、 ムラの有力家族であった。 石材の供給と運搬の便と の話 あ

室の最下段の石材は、箱型になるように立て 学的配慮があったらしい。 るところをみると、上部の荷重を考慮した力 て用い、その平面形も胴張りのあるものがあ



図153 塚原古墳群(1:10000)

に結ぶところをみると、 墓がおこなわれ、塚原古墳群のように 一○○基以上の墓が 群集し、「塚原八十塚」の名称さえ生じた。この る集団が、それぞれ居住地を異にすることと対応することによるのであろう。ただ、いずれの道筋も安威川 東側斜面にいたる。 筋を遡って阿武山の南側斜面にいたり、他は件の橋の南二○○メートルに開口する谷筋をとおって阿武山 つの谷筋を主要な道として分つことができる。 ぶ墓道をも想定されるようになった。広大な塚原古墳群も、各群にいたる墓道を見分けるなら、 つの家族 ように群集するものを「群集墳」と呼んでいるけれども、小規模なものでは数基で構成される場合もある。 一○○基にもおよぶ場合でも、その基本的単位は二ないし四基の古墳が集積したもので、そこには (世帯共同体)が世代を重ねて古墳をつくり加えていった様子がらかがえる。いまでは、それらを結 こうした道筋と、尾根や斜面の利用に多少の相違がみられるのは、この群集墳を構成す 葬送の棺は安威川沿岸のムラむらから発して、この丘麓にいたったとみられる。 一は安威川にかかる道潅橋の北一○○メートルに開口する谷 大きくは一

濠をめぐらした一辺約九メートルの方墳であり、その内部には箱型の木棺一基を土中に直葬してあった。 後述の他の群集墳とはやや性格を異にする。また、丘頂に近いN群や丘麓のB群等には、矮小な小型石室が 容し得るほどの簡単な石囲い状の石室であり、 側斜面ではE・F・Gの三群が比較的早くつくられたらしい。そのうちには、馬具や馬形埴輪などを有し、 この群集墳の成立は、六世紀中頃にはじまると推定されるが、阿武山南側斜面では、高所にあるD群、 この群集墳の終期に近い段階の姿を示している。とくにN群については、 副葬品もまた乏しい。そのうち、尾根を異にするN2号墳は 木棺一基をかろうじて収 他 東

墓

の詳細は第六巻にゆずるとして、一、二の注意にのぼる事柄を付記しておこう。

178.1 177.8 177.6 177.5 177.4 177.1 Ó 5m 177.0 赤褐色混礫粘質土層 暗黄灰色土層 黑色土層 **检揭色混碟粘質土層** 炭粒混み 00須恵器 ☞ 棺金具 ペ 棺金具 NZ.

塚原N2号墳の墳丘と主体部

筋から東南へのぞむ一点に殿岡神社境内の古墳があり、 に南の丘麓のA群中にも濠をめぐらす一基の方墳があるが、その年代は詳かでない。 塚原古墳群の北約七○○メートルの片ケ谷の谷奥にも、 そこからさらに南へ行くと、

される独立墳がある。こうした独立墳の選地は、片ケ谷から、奈佐原・岡本へ通ずる谷筋が、その南方へひ ろがるムラむらの道筋にあたることを暗示しているのであろう。 大小四群からなる群集墳が知られている。この谷 谷中に皇子塚古墳と称

の

南に近く、

郡家の北の後背丘陵は、すでに宅地化してしまったが、

かつてその丘の尾根上には郡家の墓地があり、

の郡家の墓であろう。

また、

芥川の西

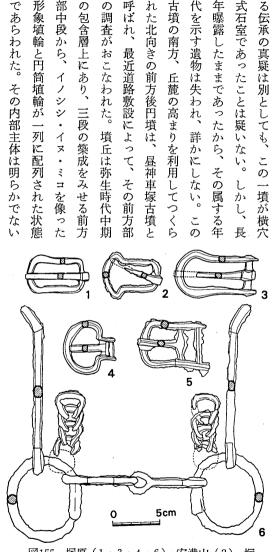
そ

六世紀後半の横穴式石室群七基があった。これらは丘麓

図154

利用した群集墳がある。そのうちには、巨石を用いて石室を構築したものがあり、 西の丘上に前方後方墳や前方後円墳を築いた首長たちの末裔であろう。 の割石を利用しているものもあって、年代の七世紀にくだるものがみられる。 塚穴にも四基の円墳がある。 それらを服部の宮之川原に結びつけ得るなら、 服部の塚脇にも、 その被葬者たちは、 また付近に産する花崗岩 帯仕山の南斜 カゝ 面 つ 7

年曝露したままであったから、その属する年 式石室であったことは疑いない。 る伝承の真疑は別としても、 天神山の参道を上った右側に小祠があり、 この一墳が横穴 しかし、長 宿弥塚の名称で呼ばれているが、この小墳を野見宿弥の墓とす



であらわれた。

形象埴輪と円筒埴輪が

部中段から、

の包含層上にあり、

呼ばれ、

れた北向きの前方後円墳は、

古墳の南方、

図155 塚原(1・3・4・6)・安満山(2)・塚 脇(5) 古墳群の馬具(1~5 籔具,6 轡)

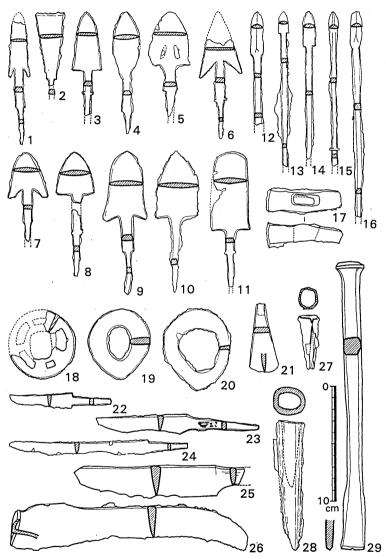


図156 塚原(1~16・18~22・24~29)・塚脇(17・23)古墳群の鉄製品(1 ~16鏃, 17槌, 18~20鍔, 21楔, 22~25刀子, 26鎌, 27・28石突, 29鑿)

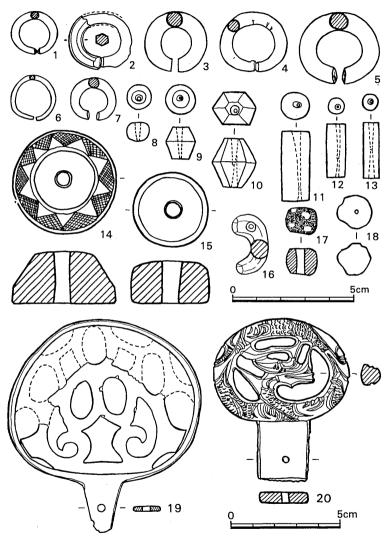


図157 塚脇(1・14~16)・塚原(2~13・17・18) 古墳群の遺物(1~ 7 耳飾, 8・9 ガラス玉, 10 切子玉, 11~13 管玉, 14~15 紡錘車, 16 勾玉, 17トンボ玉, 18 空玉, 19・20 把頭)

П

が、 は 者の墓とするに十分である。 そのまま残したものがあり、 を算する群集墳が尾根上に点在する。六世紀後半を中心につくられたこの古墳群には、 ている。紅茸山の横穴式石室もそれらと一群をなすものかもしれない。安満の北の安満山には、 りであろう。 けれども、 およぶもので、六・七世紀にこの近傍にムラが点在していたことを示している。 東方より望見し得る一群の首長墓であったと推定できる。 ほぼ五〇〇~六〇〇メートルごとにみられる。 塚原のそれに比べるなら、武人的色彩に乏しい。 この昼神山の中将塚やさきの宿弥塚・車塚、 別所の北には、 丘頂に横穴式石室を営む羅王山古墳があり、その南や東の斜面に古墳が群在し ただ、この群集墳は武具や馬具を副葬するものが少ないから、 なかに方墳や埴輪をそなえたものもあって、その規模から推して、 その延長は神内の数基の古墳や島本町の越谷古墳群にも 安満山の麓にも数基をもって一群となる古墳の集団 さらに南の分水界上にあったと推定され そのムラは、 東麓の古曽部から安満西のあた 墳丘や石室の旧状を その被葬者の性 安満の有力 四〇基以上 る 皷 塚

市宿久庄の南塚古墳がそれであって、近くの青松塚古墳や海北塚古墳も含めて、これら三基の古墳は の古墳がみられたが、その性格は明らかでない。 な横穴式石室があり、 丘上に築かれた前期の紫金山古墳につらなる首長墓であろう。また、茨木市福井の将軍山古墳の北にも巨大 る見付山古墳や特異な構造をもつ上寺山古墳(窯塚) などがみられる。 帯にも小墳の群集があったし、その南の穂積近辺では、塚原古墳群の一墳と墓壙・石室の法量を同じくす これまで述べてきた群集墳と同様の横穴式石室を用いながら、 同耳原には方形の鼻摺古墳や二基の石棺を有する耳原古墳などがみられる。 前方後円形の墳丘をもつものがある。 また、 総持寺一帯の台地上にも、 茨木市郡 かつて

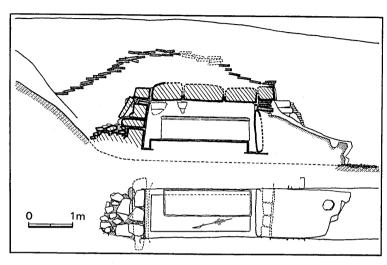


図158 阿武山古墳の石室

里丘陵の窯業地帯から、東辺の水無瀬川沿岸地域またことを示すのであろう。三島の沃野は、いまや千が、この段階に一つの大きな成果を生みはじめてい続々と成立していくのは、前代からの耕地 の 拡 大

で一体となって、

新しい歴史の中に組織されつつあ

ったといえよう。

青人の墓 塚原の群集墳の消えていくその最後 大の墓の主が「藤原鎌足」その人か否かを決し に、老年の貴人の墓が一基忽然と姿をあらわす。そ に、老年の貴人の墓が一基忽然と姿をあらわす。そ に、神棚とも呼ばれる美人山の頂

おこなわれているのであろう。茨木市安威川沿岸のみるように、広範かつ活発な地域的発展をみせる。みるように、広範かつ活発な地域的発展をみせる。

溝で遺跡のような巨大なムラが、中小河川の沿岸に

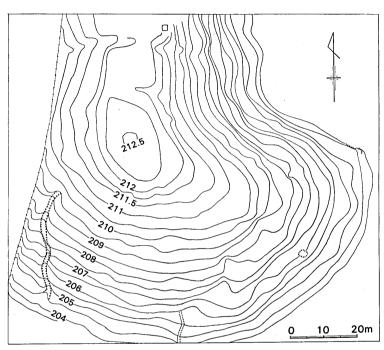


図159 阿武山古墳の墳丘

棺がおかれ、棺内には六○歳前後 幾重も重ねてつくった黒漆塗りの 内壁には棺台を設け、内壁や棺台 ことになる。 ら阿武山へ改葬したとする所伝 中臣氏の故地であり、山階精舎か なら、この足下にひろがる安威が 蹟名勝天然記念物調査報告』七、上津阿武山古墓調査報告」『大阪府史》。 糸・銀糸が散らばっていた[梅原末 らねた玉枕がおかれ、身辺に金 た。その頭辺には、ガラス玉をつ と推定される男性が横たわってい には漆喰を塗り、台上には麻布を ことを示している。小さな石室の は、その事実の一端を語っている この貴人が鎌足であるとする

古 墳の終焉

三島の地に古墳が出現して以後、

れていることにある。その点で古墳時代の集落の調査は急務であろう。 期のムラの具体像が描ける状況にない。その最大の理由は、 れつつある現状では、その作業は極めて大きな困難を伴う。 人間社会のらつりかわりを端的に示しているといえよう。しかし、なお弥生時代に比べるなら、 世紀後半以降は、 複雑に分化し、多様化する社会の姿を、古墳の変遷は垣間みせてくれる。 個々の墓と集落の対応関係や集落の調査がお しかし、平野も丘陵も急速に破壊さ 古墳時代各

は、 いまや古墳をつくった階層の基盤さえゆるがしはじめていたのであった。 の造営に力を傾けてきた社会とは画然と区別される時代に突入したことを示している。そこにまちかまえて れた蔵骨器は、 た。三島県主の創建と推定される芥川廃寺の出現はその一例である。そして、西の岡本山の南斜面に埋めら その画一的な埋葬形態こそ、新たに人びとを 組織化しはじめた 律令的古代国家の成立した 姿で あった。 者が社会的に上位の階層に属する人物であることは明白である。古墳時代が終焉する七世紀前半には、新し い国家機構につらなる一部の「貴人」を除いて、大方は再び集落外辺の共同墓地に埋められるようになる。 律令的斉一化の時代に包みこまれはじめたことを物語る以外の何ものでもなかった。その巨大な力は、 漸く浸透してきた仏教に帰依した首長層は、力の限りをつくして寺の造立に一族の繁栄を期待しはじめ 集団墓地の中の小さな石室墳でさえ、狐塚のような蝟集する土壙墓群と比べてみるなら、その被葬 戸籍をつくり、 仏教に帰依した県主一族の墓地であろう。こうした七世紀後半の世相は、 計画的に厳しく搾取する機構をそなえた社会であった。 古墳が姿を消 かつて営々と古墳 す段階

約三五〇年の間にはさまざまな変遷があった。とくに、五